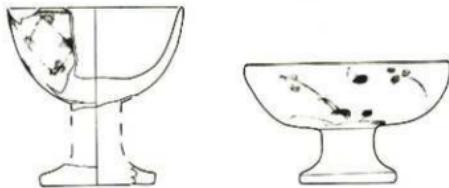


山梨県塩山市

伊保水遺跡

IBOMIZU SITE

山梨県立産業技術短期大学校建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1998. 3

山梨県教育委員会
山梨県商工労働観光部

山梨県塩山市

伊保水遺跡

1998. 3

山梨県教育委員会
山梨県商工労働観光部

序

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成9年度（1997）に調査を行った、山梨県塩山市に所在する伊保水遺跡の発掘調査報告書であります。この調査は山梨県商工労働観光部が実施する、産業技術短期大学校建設事業に先立つもので、対象面積3,400m²に及ぶ地域が発掘されました。本遺跡は江戸時代に甲州裏街道として栄えた青梅街道に接する地域であり、付近には現在も多数の石像物等が残されております。このような状況の中で本調査では縄文時代前期末の土坑10基、中世の住居跡1軒、近世の墓壙19基等が発見され、当時この付近が賑わっていた様子の一端を垣間みることができました。

とくに当時の地籍図などから、これら近世の墓壙群が屋敷地に属していた可能性が高いことを知ることができます。また発掘調査から埋葬の際、一定の墓域が決まっていたことが立証できたことは注目されるべきことであります。これらの屋敷墓がどのような形態で営まれるのか、今回の発掘調査で得られた資料が今後の研究の端緒となれば幸いです。

またこの地域は江戸時代には黒川金山衆居住の地域であったともいわれており、金山採掘等の歴史上的問題を考える上でも、貴重な成果を出すことができたと考えております。今後の周辺地域の調査・研究に大いに期待したいと思うところでございます。

末筆ながら、調査にあって御協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に従事された多くの方々に厚くお礼を申し上げる次第であります。

1998年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

例　　言

1. 本書は、県立産業技術短期大学校建設事業に伴って1997年度に実施された塩山市伊保水遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は山梨県商工労働観光部職業能力開発課産業技術短大校設置準備室から山梨県教育委員会が依頼され、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが行い、同機関の石神孝子・米山真がそれぞれ担当した。
4. 本書の編集は石神が行った。執筆分担は第2章第1節を米山が、第3章第1節（3）石器を網倉邦夫が、それ以外を石神が担当した。
5. 遺構・遺物の写真撮影は石神・米山が行った。また写真図版番号3・4・23・26については日本写真家协会会员、塙原明夫氏に撮影依頼した。
6. 本遺跡から出土した人骨の鑑定に関しては、聖マリアンナ医科大学の平田和明教授に委託し、その結果は第4章人骨の鑑定に記した。
7. 本書にかかわる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　　例

1. 遺構・遺物の縮尺は原則として次の通りである。ただし、特殊な遺構及び遺物に関してはこの限りではなく、その場合は図版に明記した。
〈遺構〉全体図 1/400、住居跡 1/60、土坑・近世墓 1/30
〈遺物〉縄文土器実測図 1/6、拓本 1/3、中世土器 1/3 及び 1/4、近世陶磁器 1/3

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査の経過と概要	1
第1節 調査の経過と概要	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織および協力機関	2
第2章 遺跡をとりまく環境	2
第3章 発見された遺構と遺物	8
第1節 縄文時代	8
第2節 中 世	15
第3節 江戸時代	20
第4章 出土人骨報告	38
第5章 まとめ	40

挿 図 目 次

第2章 遺跡をとりまく環境

第1図 伊保水遺跡周辺遺跡分布図	4
第2図 伊保水遺跡全体図	5

第3章 発見された遺構と遺物

第3図 土 坑	9
第4図 土坑出土遺物	10
第5図 包含層出土遺物（1）	11
第6図 包含層出土遺物（2）	12
第7図 石器（1）	12
第8図 石器（2）	13

第9図	第1号住居跡	16
第10図	1・2号溝	17
第11図	溝出土遺物（1）	18
第12図	溝出土遺物（2）	19
第13図	土坑	19
第14図	石垣及び周辺遺物出土状況	21
第15図	1～3号溝	22
第16図	4～15号墓及び4号墓出土遺物	23
第17図	遺物出土状況及び4～8号出土遺物	24
第18図	9～15号墓出土遺物	25
第19図	A区墓坑配置図	26
第20図	16～19号墓	27
第21図	3・4号墓	29
第22図	5号溝及びセクション図	30
第23図	包含層出土磁器	31
第24図	包含層出土陶器	32
第25図	包含層出土かわらかけ及び陶磁器	33

写真図版目次

1	B区完掘状況	17	4号墓出土キセル雁首
2	2号土坑遺物出土状況	18	4号墓出土遺物
3	2号土坑出土遺物	19	5号墓出土遺物
4	2号土坑出土遺物	20	6号墓出土遺物
5	包含層出土遺物	21	7号墓出土遺物
6	土坑出土遺物	22	8号墓出土遺物
7	C区中世1・2号溝	23	9号墓出土遺物
8	溝出土内耳土器	24	11号墓出土遺物
9	溝出土擂り鉢	25	12号墓出土遺物
10	調査風景	26	13号墓出土遺物
11	調査前の状況	27	16～19墓全景
12	道路添いに立地する地蔵	28	18号墓出土遺物
13	2・3号墓	29	19号墓出土遺物
14	2・3号墓出土鉢貸	30	16号墓
15	4～15号墓	31	16号墓出土遺物
16	4号墓出土キセル吸い口	32	包含層出土遺物

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経過

伊保水遺跡は甲府盆地の北東部から東部にかけ、笛吹川など複数の河川によって形成された大規模な扇状地上を流れる重川と塩川に挟まれた微高地上に位置している。現在県職業能力開発センター及び県職業訓練校となっている旧塩山高校敷地とその周辺を利用した県立産業技術短期大学校の建設が計画された。しかしこの付近は中・近世にかけ黒川金山衆の屋敷があった地域として知られており、当該区域内の石垣の一部に墓石や台座と見られる石造物が利用されていた他、石仏なども該当地域内の數ヶ所で確認された。また中・近世の陶磁器等の出土も認められることから、県商工労働観光部より県教育委員会に対して遺構確認に関する調査依頼があり、平成8年度本調査に先立って当センターによる遺構確認調査が行われた。

調査は、建設予定地の中でも新しく造成を行う約19,000m²内に幅1m、長さ5~30mのトレンチを計35本（うち今回の発掘調査実施区域に該当するものは10本）設定して実施した結果、そのほぼ全域から縄文時代中期、平安時代、中世、近世にかけての土器・石器・陶磁器類などが出土した。また一部のトレンチからは中・近世とみられる溝状遺構も確認されたため、その翌年度に本調査を実施した。

第2節 発掘調査の概要

試掘調査時における遺構・遺物の検出状況から、予定地全域をいくつかに区切った中でも比較的遺物の密度が高く、遺構の残存状況も比較的良好で調査の成果が期待される中央部および東側の約2,000m²が本調査区、北西側に位置する約1,400m²が予備調査区として設定された。発掘調査は1997年5月13日~9月5日までの約4ヶ月間にわたり、最終的には前述した両調査区計約3,400m²について実施した。また調査区北側に所在する墓石周辺部では、新たに近世墓4基を確認した。そのためこれらについても調査を並行して行った。

調査区内には5m×5mのグリッドを設定し、北から南へA~Oのアルファベット、西から東へ1~26の算用数字をそれぞれ付した。前述のような状況から一度に全面の調査を実施できず、最初に調査を行った中央墓域部分を基準に、各調査区の調査と並行する形でグリッド設定を行っていった。しかし調査区でも北側に位置する16~19号墓部分の調査時にはAグリッドよりも北になる部分が生じたためこの部分に関しては南から北へ小文字のa・bを付した。

発掘調査は表土から確認面までは、いずれの調査区に關してもまず重機によって排土作業を行い、その後遺構確認面までは入力（主にジョレン）を利用して排土及び遺構の確認作業を行った。遺物の取り上げに関しては基本的には各遺構ごと、平板を使用して行ったが、遺構に伴って出土していないものや一部遺構と時代が異なるものは上記の方法で設定した各グリッドごとに、重機による排土作業の際に取り除かれた土や、表土（耕作土）中から確認された人骨片や土器・陶磁器類に関しては表探として、それぞれ一括して取り上げた。

その結果、調査区ほぼ中央部の屋敷墓とみられる部分からは、江戸時代中~後期の墓坑15基がほぼ2ヶ所に集中して、重なった状態で確認された他、縄文時代の土坑10基、中世とみられる住居跡1軒、中・近世のものとみられる溝状遺構6条などが出土した。墓坑の多くからは人骨片が見つかった他、一緒に埋葬されたとみられるキセル、火打石、漆塗りの椀などを確認した。また墓石などが確認されていたため調査を行った北側調査区からは前述墓域とほぼ同時期とみられる近世の墓坑4基が確認され、人骨や副葬品とみられるキセルなどが出土した。その他、調査区全域から、主に中・近世の陶磁器片が出土したが、その他縄文時代の前・中期、平安時代の土器・石器類などが出土した。

第3節 調査組織および協力機関

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 石神 孝子（山梨県埋蔵文化財センター 文化財主事）
米山 真（ 同 上 ）
作業・整理員 林周子 黒瀬信子 藤原美代子 雨宮久美子 寺内みち子 戸田ひろ 菅沼芳治 飯田みづ
ほ 古屋茂美 山下好 望月哲夫 萩原理江子 渡辺佳子 佐々木富士子 長田てるみ 長
田久江
協力者・機関 山梨県商工労働観光部労政能力開発課産業技術短大校設置準備室 塩山市産業技術短期大學
校建設推進室 塩山市教育委員会・飯島泉 山梨市教育委員会・三澤達也 聖マリアンナ医
科大学 平田和明・星野敬吾

第2章 遺跡をとりまく環境

本遺跡は甲府盆地の中でも東部の山沿いに位置する塩山市の中央やや北寄り、千野地内の緩やかな南向きの斜面上にある旧塩山高校敷地のすぐ北側に位置し、標高は約430mである。JR中央線の塩山駅や、市内をほぼ南北に通つて大菩薩峠方面へと抜ける青梅街道を中心として古くから発展した市街地のはば北端部分に所在すると共に、すぐ西には塩ノ山、その後ろには乾徳山、北から北東にかけては秩父方面にまで広がる大菩薩嶺が控えており、扇状地の緩斜面から山地へと移り変わる地点もある。また周辺の赤尾、上・下於曾などと並び、大菩薩峠山中の黒川金山採掘に携わったいわゆる「黒川金山衆」が多く居住していたことでも知られる地域である。

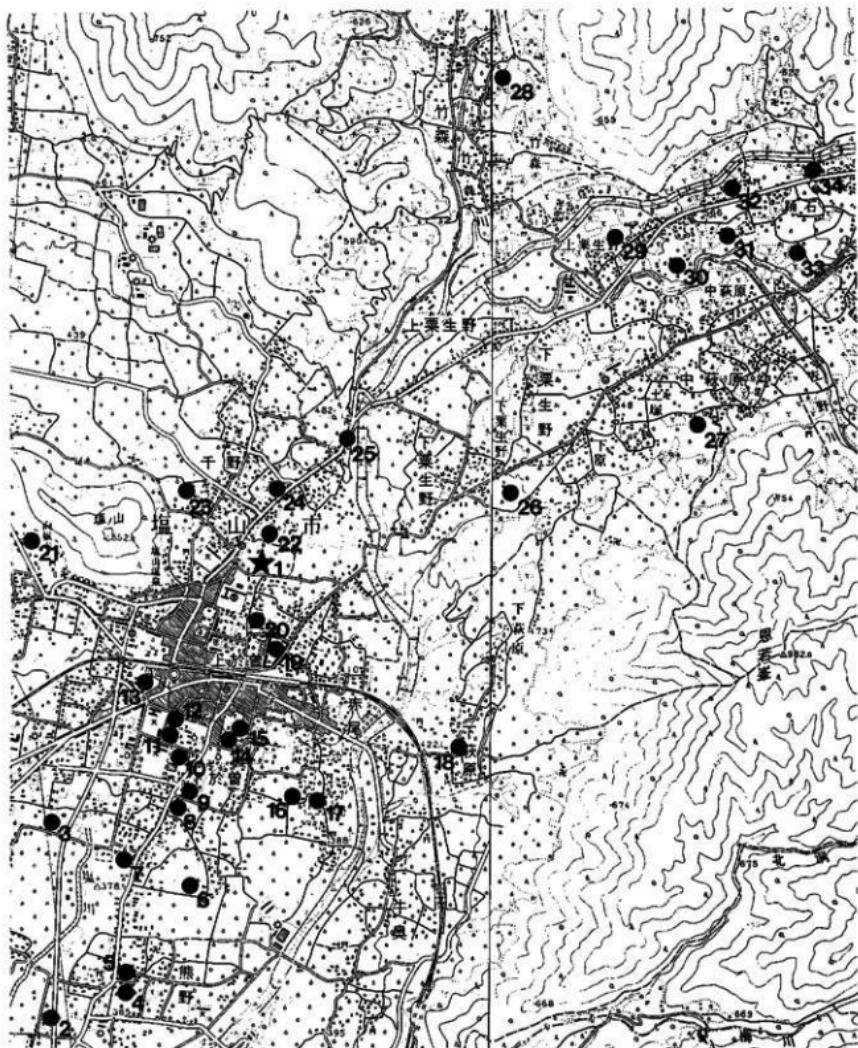
本遺跡の南西約200mのところに山神社の小さな祠があり、これが水神として祀られている事からも分かるとおり、この一帯は古くから扇状地上を流れる河川による大規模な洪水に定期的にみまわれており、堆積土層はほとんどが重川の出水によってもたらされたとみられる水はけのよい砂礫層である。特に基盤層となっている黄色砂質土中には、前述洪水の中でも大規模なものによってもたらされたと考えられる、直径約1～数m規模で凹凸の多い岩が多数含まれている。このような岩は下流域も含めたこの扇状地一帯で見られるが、本遺跡付近には特に大きなものが含まれるということで、これが地元での通称（地元では現在でも「イボイシ」という呼称の方が一般的で、「イボミズ」の方はほとんど使われない。ただし、これが現在のような小字名に変わった詳しい経緯は不明）の原因になっているものと考えられる（実際に、「イボイシ」の由来と言われる石が付近の民家の庭に残されている）。

では、次に本遺跡と周辺に分布する遺跡との関連についてみていくと、本遺跡周辺には縄文時代にあたる遺跡が比較的多く確認されており、近くにあるものを挙げてみても本遺跡の北東約1km、千野橋のすぐ南に位置し、縄文～近世と広範囲にわたる遺構・遺物が確認されている獅子之前遺跡、そのすぐ西側の青梅街道沿いに位置する小山平南遺跡、本遺跡の南側約100mに広がり、縄文時代中期の散布地とされる梅の木遺跡などがある。更にその北側には、出土した大型深鉢が国の重要文化財に指定されている殿林遺跡や、付近の通称“水晶山”で採取された水晶を材料とする石器の製作が行われていた乙木田遺跡をはじめとして安道寺、柳田、北原、重郎原などの各遺跡がいずれも重川やその支流である竹森川に沿った地域で確認されている。この流域に分布する縄文時代の遺跡は大部分が中期に該当するものであり、本遺跡も時代的にはほぼ同じであるためこれらとの関連性が注目されるところだが、縄文時代中期の集落跡や前期の土偶が確認されている獅子之前遺跡に関しては本遺跡と距離的にも近いため、特に注目すべきであろう。

統いて中・近世についてだが、本章の最初で触れたように、この地域は青梅街道などを中心とした古くからの市街地として発展してきたが、上於曾の草屋敷（旧高野家住宅）の名前でも分かるように、かつては江戸向けに薬草類や「千野煙草」と呼ばれた煙草なども栽培され、青梅街道を通つて出荷されていた。また、現在宅地以外は前述のように水はけのよい土地柄からぶどう・すももなどの果樹栽培に多く利用されているが、これは主に明治時代に入ってから広がったものであり、江戸時代には水田だったようである。

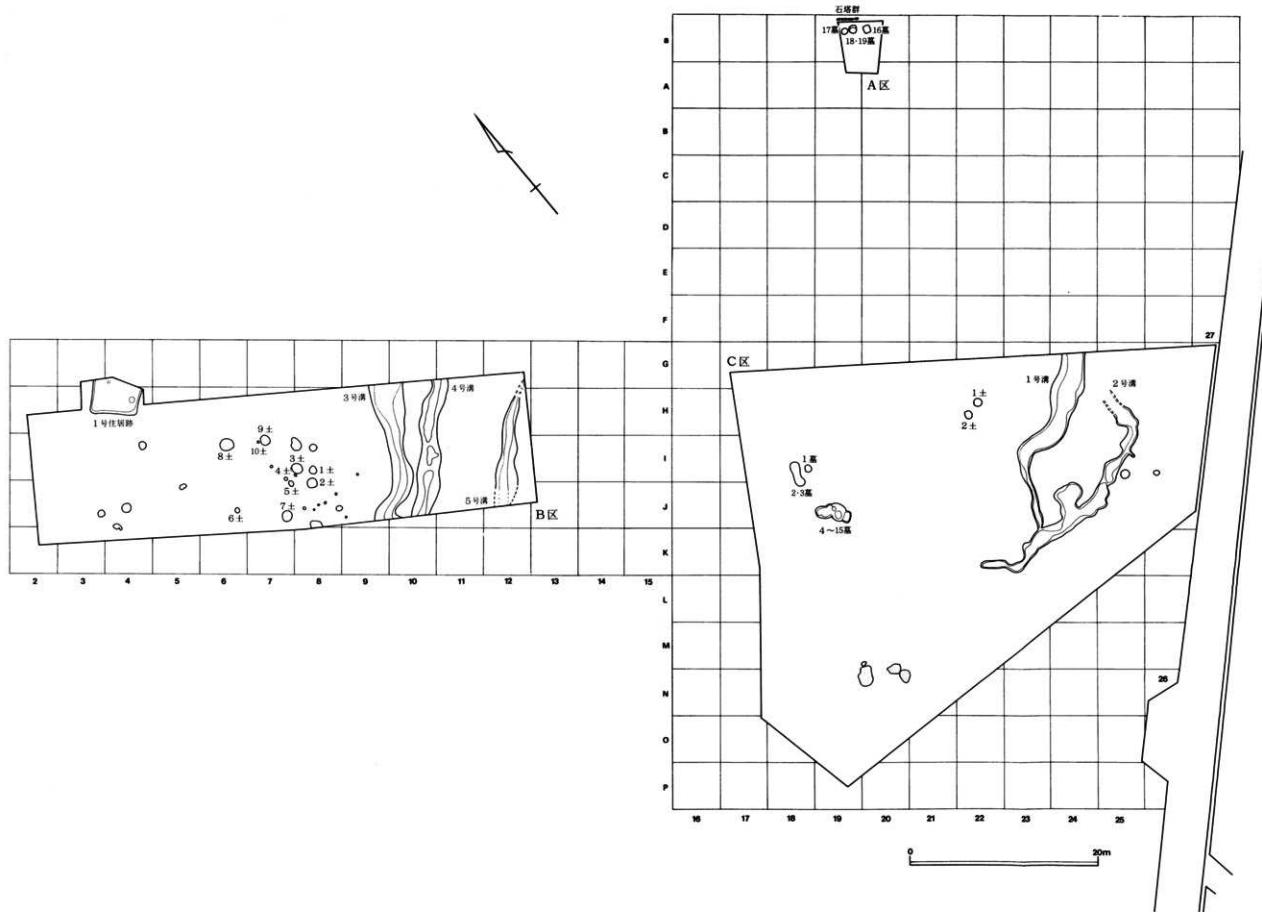
塩山市内には現在県指定史跡となっている下於曾の於曾屋敷の他、宇賀屋敷、池田氏屋敷など在地有力者の屋敷跡が多数確認されており、本遺跡の北側約300mにある慈徳院という寺院についても、室町時代に甲斐国の大守護であった武田信春の死後、彼の遺志でその居館跡に建立されたとのことである（現在は土塁や石積みの跡が一部残存している程度）。また『塩山市史』では本遺跡付近を元亀二年、天正二年の武田氏印判状に名前が見られ、黒川金山衆の一員とされる古屋清左衛門の屋敷跡と比定している¹⁾。

塩山市内の寺社は、武田氏との関連などもあって中世以降に建立されたものが多い。中でも寺院に関しては、上於曾にある向嶽寺（臨済宗向嶽寺派）や藤本の放光寺（醍醐寺報恩院末、現在は真言宗智山派）、小屋敷の恵林寺（臨済宗妙心寺派）などを中心として発展していったため、県内他地域に比べても数は多いのだが上記宗



1. 伊保水遺跡
2. 西田遺跡
3. 町田遺跡
4. 深沢氏屋敷
5. 依田兵部左衛門屋敷
6. 中村氏屋敷
7. 風間氏屋敷
8. 依田宮内左衛門屋敷
9. 田辺氏屋敷
10. 宇賀壁敷遺跡
11. 池田氏屋敷
12. 字賀屋敷
13. 菅田天神社遺跡
14. 於曾屋敷
15. 於曾屋敷遺跡
16. 八代氏屋敷
17. 保坂氏屋敷
18. 下萩原浅間塚
19. 於曾三郎屋敷
20. 橋爪氏屋敷
21. 向嶽寺庭園・大方丈跡
22. 古屋清左衛門屋敷
23. 村田氏屋敷
24. 武田信春館跡
25. 獅子之前遺跡
26. 安道寺遺跡
27. 萩原氏屋敷
28. 乙木田遺跡
29. 梅田遺跡
30. 北原遺跡
31. 緑屋敷遺跡
32. 重郎原遺跡
33. 岛林遺跡
34. 中村彌左衛門屋敷

第1図 伊保水遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)



第2図 伊保水遺跡全体図

派以外のものはほとんど見られない（先の慈徳院も、臨済宗向嶽寺派の末寺である）。だが、本遺跡で確認された墓石には一部風化していたため読みなものもあったが、戒名の上部には他の宗派の場合一般的に「記」「蓋」「南無妙法蓮華經」などとあるのに対し、本遺跡の墓石には「法（同）會」、その下には「釋（この後に男性の場合は「淨」、女性は「尼」）」と彫られていた。また、同じく戒名の下には「（各）不退位」という文字が見られたが、これらの特徴はいずれも浄土（真）宗のものであった。

ここで問題となるのは本遺跡近辺に浄土（真）宗に属する寺院が存在していないことなのだが、（周辺の住民から聞いた話を総合すると）この一帯は黒川金山の採掘関係者が江戸時代に大藤（現在の上・下栗生野と上・中・下萩原を併せた総称、主に本遺跡のある千野の北側地域一帯を指す）から移住してきたということである。また墓石に関しても元々は下栗生野にある法正寺（現在も同所にある）という寺院の檀家であったが、明治時代に入ってから前出慈徳院の墓権家（菩提寺が遠く定期的な参詣などが困難なため、宗派は変えずに墓地のみ近くにある寺院に移す）となったため、このような特徴が見られるということである。本遺跡の屋敷墓の墓石に見られる元号は最も古いもので「正徳」、新しいものでは「享和」と江戸時代中～後期（18世紀初頭～19世紀半ば頃まで）にあたり、この点だけみれば周囲の人の証言と時期的にほぼ一致している。

戦国時代を最盛期とする甲州金山の中でも最大規模のものとして挙げられるのが黒川金山だが、武田氏滅亡後も17世紀初頭まではこれまでと変わらず採掘が行われていた。だが、同世紀の半ば頃までは産出量の減少などに伴って衰退し、関係者の他の金山への流出などと共にその規模は次第に縮小していったと考えられている。有力金山衆の多くは中世にはすでに前出街道沿いの地域を拠点として活動しているのだが、黒川金山の衰退に伴って他の鉱山に移るのと同様、金山採掘から離れてより市街地に近い地域に移住してきた金山関係者（金山衆や有力者とは限らない）もあったと考えられるのではなかろうか。

本遺跡の位置する千野に限らず、塩山市には屋敷墓の跡とみられる区割りや、その名残とみられる江戸時代頃の墓石、石仏等が道端に並んでいる事が多く、また街道などの関係もあって古くから道路の整備が進んでいたため道祖神や六地蔵（特に本遺跡の西側約500mの道路沿いにあるものは、県の文化財指定を受けている）など他の石造物も多く見られる。これらに関する分布調査も何度か実施されている²⁾のだが一部のもの、特に屋敷墓に關係する墓石や石仏に関しては道路や宅地等の開発に伴って元の場所から移動され、当初の位置関係や目的などが不明になってしまったものも多い。屋敷跡に關しても現在土壠や石垣からその区割りが分かる程度でそれ以上の事はわからないものも多いため、これらの全体像をつかむことは難しいのが実状である。しかし、これらは市内を走る街道や水路、寺社の分布などと並び、中・近世における市街地の開発・拡大と發展を考えていく上でいずれも必要不可欠な要素であり、今後はより総合的な調査が期待される。

註

- 1.『塩山市史』 塩山市教育委員会 1996
- 2.『塩山の道祖神』 塩山市歴史協会・塩山市教育委員会 1995

ここでは塩山市内における道祖神の分布とその種類、前出『塩山市史』では五輪塔、宝鏡印塔など他の石造物を含めた包括的な分布について、述べられている。

〔参考文献〕

- 『塩山市史』 塩山市教育委員会 1996
『塩山の道祖神』 塩山市歴史協会・塩山市教育委員会 1995
『獅子之前遺跡発掘調査報告書』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第61集 山梨県教育委員会 1991

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 繩文時代

縩文時代の遺構および遺物は、B区に集中している。確認した遺構は縩文時代前期末に位置づけることできる土坑10基であり、いずれも該期の土器片を含む。

(1) 土 坑

第1号土坑（第3図1） 長径1.00m、短径0.75m、深さ0.75mを測る。壁の立ち上がりは急で、人頭大の礫が含まれていた。土坑内からは縩文時代前期末に位置づけることできる土器片が出土した（第4図1～4）。いずれも体部に縩文が施される。1は口縁部で口縁端部は肥厚気味であり若干内湾する。また同じ層から打製石斧が出土した（第7図1）。

第2号土坑（第3図2） 本土坑は第1号土坑の南側に位置しており、長径1.10m、深さ0.50mのほぼ円形を呈する。壁の立ち上がりは直であり、底面は平坦である。1層の黒色土層中より深鉢型土器が出土し、さらにその直下では焼土面が確認された。第4図7～12は出土遺物である。7・8および10は同一個体で、ともに口縁部であり内側へ折り返されている。体部は縩文が施されるが磨耗が著しく、単位は明確ではない。口縁部付近は無文で、指頭圧痕により調整される。内面は全体的に黒く焦げている。9は結節縩文が体部に施される。11は粘土紐に凹凸をつけた押圧隆帯文をもつ。深鉢型土器の胴上半部であると思われる。

第3号土坑（第3図3） 第1号土坑の東に位置しており、長径1.30m、短径1.20m、深さ0.55mの円形を呈する。壁の立ち上がりはやや急であり、底面は平坦である。1層黒色土層中より石錐（第8図1）、土器片が出土した。第4図5・6は体部に縩文を施すものである。

第4号土坑（第3図4） 第3号土坑と北側で重複しており、不整円形を呈する。長径0.40m、短径0.35m、深さ0.40mを測る。壁の立ち上がりは直であり、底面は緩いすり鉢状を呈する。第1層暗茶褐色土層中より土器片が出土したがいずれも団化することはできなかった。

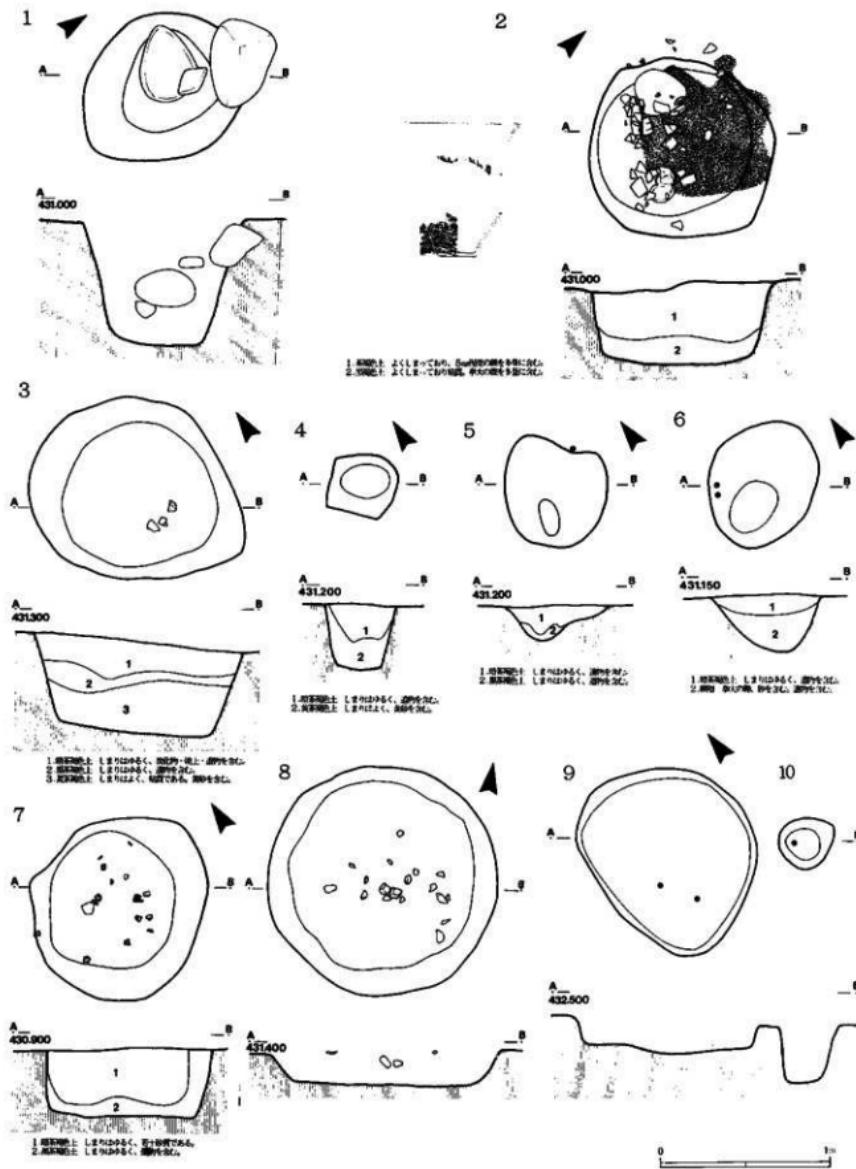
第5号土坑（第3図5） 第2号土坑の東側、および第3号土坑の南側に位置する。長径0.60m、短径0.55m、深さ0.20mの不整形を呈する。底面は壊り鉢状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。

第6号土坑（第3図6） 長径0.80m、短径0.60m、深さ0.35mの梢円形を呈する。壁の立ち上がりはやや緩やかで、底面は壊り鉢状を呈する。土坑群からは離れ、単独で所在する。土坑からは土器片が数片出土したが、団化することはできなかった。

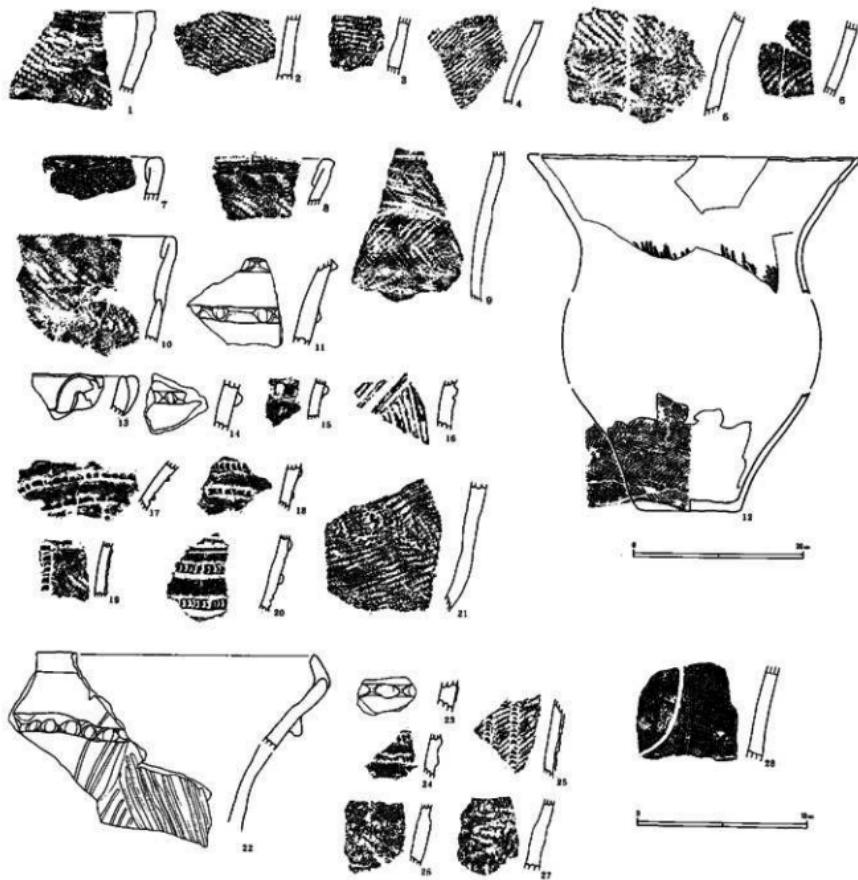
第7号土坑（第3図7） 長径1.10m、短径1.00m、深さ0.40mの不整円形を呈する。浅く、壁は直に立ち上がっており、底面はやや凹凸が施される。第1層黒色土層中からは縩文時代前期末に位置づけることできる土器片が多数出土した（第4図13～21）。13は口縁部で隆帯を張り付けにより波状に施したものである。また14・15は張り付けた隆帯に押圧を施したもので深鉢の上半部であると思われる。17～20は細い粘土紐を張り付けた隆線に押し引きを施す。19は地紋に縩文を施し、その上部に細い粘土紐を張り付け、押し引きを施す。

第8号土坑（第3図8） 長径・短径ともに1.30m、深さ0.20mを測り、ほぼ円形を施す。浅く底面は平坦で、立ち上がりは緩やかである。土坑内からは拳大の礫、土器片が出土した（第4図22～27）。22は深鉢型土器の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口唇部は直に立ち上がる。体部には沈線を施し、その上部に粘土紐状の隆帯を添付し、押圧を加える。25は地紋に縩文を施し、その上部に極細の粘土紐を張り付けた隆帯に押し引きを加えたものである。

第9号土坑（第3図9） 長径1.10m、短径1.30m、深さ0.20mを測り東西に長い梢円形を呈する。浅く底面はやや凹凸であり、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は土器片が少量出土したがいずれも小片であり、土坑の帰属年代を推し量ることのできるものは第4図28のみである。



第3図 土坑



第4図 土坑出土遺物

第10号土坑（第3図9） 長径0.30m、短径0.30m、深さ0.30mの不整円形を呈し、第9号土坑の東側に位置する。該期の遺物が若干出土したが、固化するに至らなかった。

(2) 包含層出土の遺物

包含層からは縄文時代前期末から晩期までの土器片、及び石器等の遺物が多数出土した。そこで土器については下記のように種類別に分類を行っていきたい。

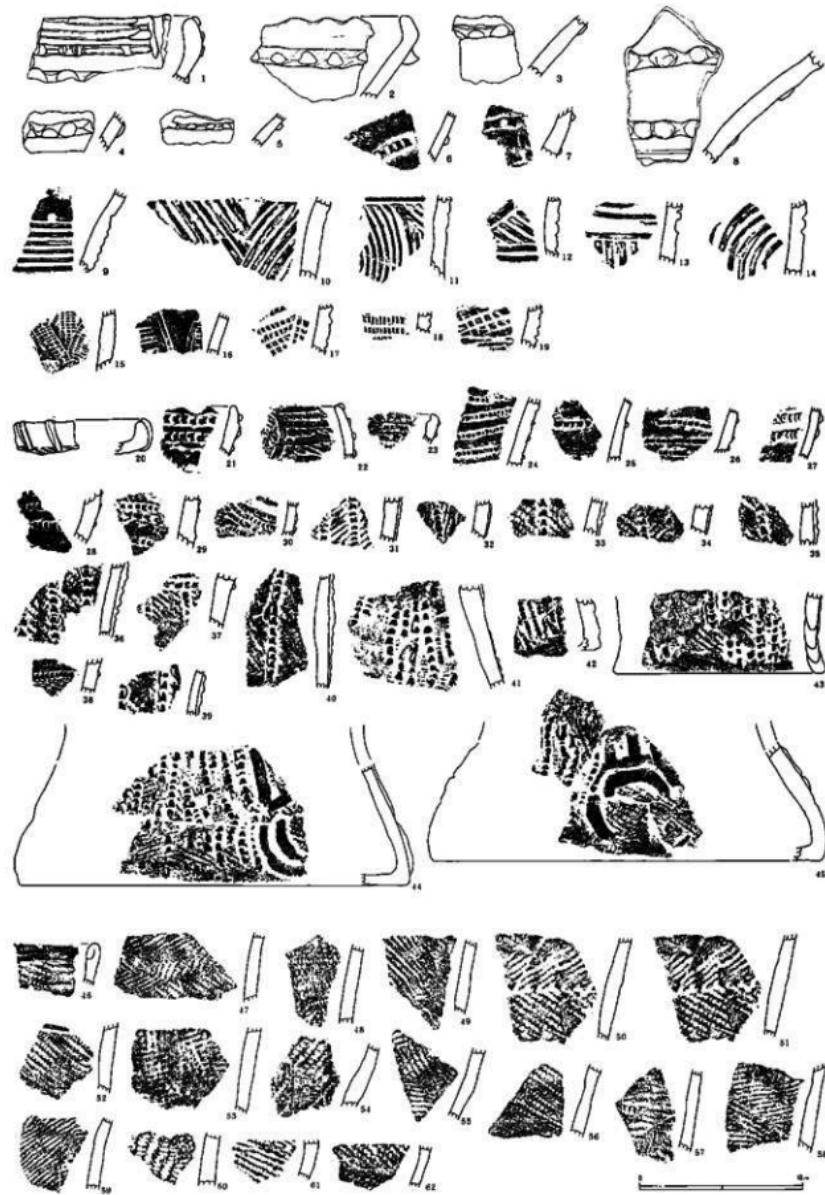
第1群 縄文時代前期末に位置づけることができるもの

第1種 口縁部または胴上半部に粘土紐を張り付け、押圧を加えたもの及び胴部に集合沈線を施した鍋屋町式系

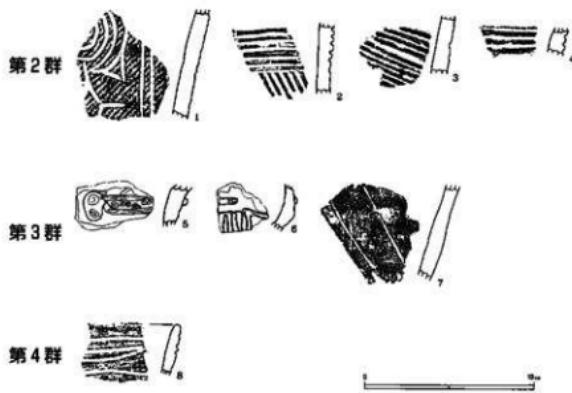
第2種 胴部に極細の粘土紐を張り付けるものまたはその上部に結節状に押し引きを加えた十三菩提式系

第3種 体部に縄文を施したもの

第1群



第5図 包含層出土遺物(1)



第6図 包含層出土遺物(2)

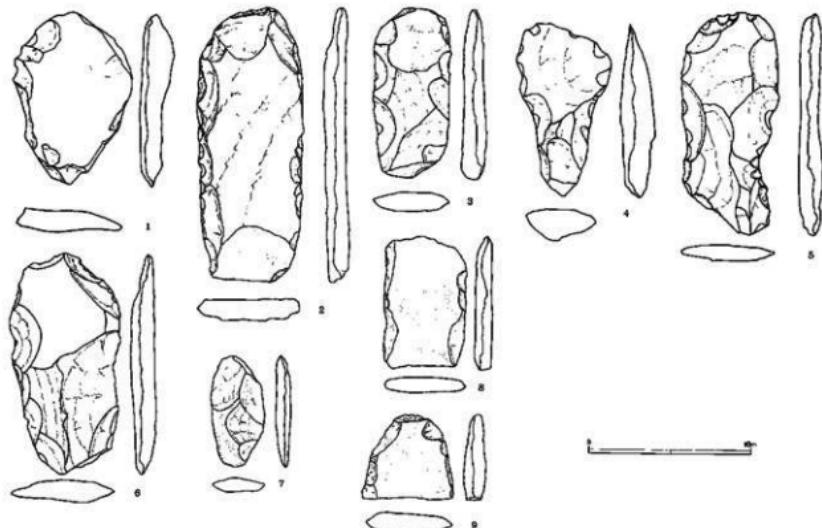
第2群 綱文時代中期初頭に位置づけることができるもの

第3群 綱文時代後期に位置づけることができるもの

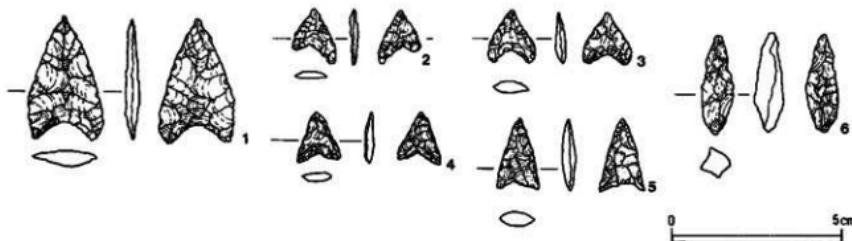
第4群 綱文時代晩期に位置づけることができるもの

第1群 第1種には第5図1~19が該当する。このうち1~8は押圧隆帯文が胴部上半部を横走するもの、または粘土紐をはりつけたものである。2は口縁部が小波状を呈する。9~14は集合沈線が施されたもので、9には三角形の堀り込みである鋸齒状印刻文が施される。

第2種には20~45が該当する。極細の粘土紐に押し引きが加えられているもので、胴上半部では横走、胴下



第7図 石 器(1)



第8図 石 器(2)

半部では縦走するものと思われる。これらは地紋に縄文が施されるもの、沈線のもの、無文のものなどいくつかのパターンが存在する。20~23は口縁部である。20は粘土紐を縦位に張り付けたもので図示できなかったが頭部には縄文が施される。また42~45は底部付近である。44、45は他よりも若干太い粘土紐を張り付けただけの文様も存在するなどバリエーションに富んでいる。

第3種は46~62が該当する。第2号土坑からも本遺跡内では最もまとまった資料が出土しており、全体の様相を推測する一助になっている。46は口縁端部を内側へ折り返すものである。51は結節縄文を施す。十三菩提式もしくは鍋屋町式系のものであると思われる。

第2群 第6図1~4は中期初頭五領ヶ台式のものである。数は非常に少ないと散在する。遺構からの出土は認められない。

第3群 5~7は後期堀之内式のものである。第9号土坑からも該期の遺物が出土している。

第4群 8は晩期清水天王山式のもので、該期の遺物はこの1点のみである。

(3) 石器

第7図1は1号土坑より出土したもので、形態的には打製石斧と認識し得るが、打面を残置するなど刃部形成の意図が散漫であり、左側縁を中心に加えられた調整が刃部作出である可能性が高いことから、大形削器であると考えられる。剥片素材のホルンフェルス製石器であり、折れ面が端部側の左右素材縁に2面存在する。左側の折れ面がネガティブであるのに対し、右側の折れ面はポジティブであり、両方ともにヒンジフラクチャ状を呈する。

2はJ-8グリッドより出土した縦長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。素材剥片の端部側に刃部を設けており、背面には主要剥離面と同一方向の先行剥離面を有する。背面左側縁においては連続的な、右側縁においては散漫な調整が加えられている。打面を取り込んだ折れ面はネガティブであり、背面側にリングを収束させる。

3は4号溝より出土したもので横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。素材剥片の左辺に刃部を設けているが、調整は散漫である。背面側における両側縁への調整は左右ともに連続的に加えられているが、左側縁において階段状剥離が発達しているのに対し、右側縁においては認められない。基部側の折れ面はポジティブ状を呈する。

4は3号溝より出土した縦長剥片を素材とした泥岩製の打製石斧である。素材の端部に刃部を設けているが、刃部作出を目的とした調整は有さず、素材縁をそのまま用いたことが窺える。基部は反時計回りの錯向剥離によって、形態が作出されたと考えることができる。左右側縁の基部作出を目的とした調整において、階段状剥離が発達している。

5はK-22グリッドより出土したもので縦長剥片を素材とした頁岩製の打製石斧である。素材剥片の端部側

に刃部を設け、打面を除去しているがバルブの一部は残置している。剥離痕はいずれも階段状剥離が発達しており、特に刃部において顕著に認められる。右側縁に抉りを有し、対向する側縁に潰れが認められることから、基部に抉りを有する形態だとわかる。

6は12号墓より出土した横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。素材剥片の左側に刃部を設けているが、刃部側の調整は散漫である。左右側縁への調整は基部側に集中しているが、これは刃部側の断面厚が薄いことに起因している。背面左側縁及び腹面左側縁においては、階段状剥離が発達している。

7は継長剥片を素材としたホルンフェルス製の大形削器である。J-8グリッドより出土した。素材剥片の右側に刃部を設け、背・腹両面に調整を加えている。打面・バルブは残置していない。刃部が大きく外湾するに対し、対向する辺はほぼ直線状である。刃部側の調整は背面側に加えられた後、腹面側に加筆されたと考えられる。

8は継長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。刃部は素材剥片の端部側に設けられており、刃部作出のための調整は腹面側にのみ加えられている。左右側縁に対する調整は背面側に加えられ、階段状剥離が発達している。中央折れ面はネガティブであり、腹面左側にバルブが存在する。

9は剥片素材のホルンフェルス製打製石斧である。刃部及び体部が失われており、基部が残置している。左右側縁への調整において、階段状剥離が顕著に発達している。中央折れ面はネガティブであり、右側縁腹面側にバルブが存在するが、側縁に連続してネガティブバルブを有することから、製作途上の折れである可能性が高い。

10は砥石である。表面及び側面は磨り面であると思われ、磨耗が著しい。

第8図1は3号土坑より出土した黒曜石製の凹基無茎鎌である。左右縁側は緩やかに外湾するが脚部までは連続せず、直線的に交わる。形態作出を目的とした調整は表面の後、裏面に加えられたことが窺える。剥離単位から考察すると表面において先端形成→基部形成→側縁形成の順であり、裏面においては側縁形成→先端形成→基部形成の順で進行する。

2はI-6グリッドより出土した黒曜石製の凹基無茎鎌である。左右側縁は先端部と脚部に段を有し、側縁中位においては直線状を呈する。左右側縁は非対称形を呈するが、これは意図された形態ではなく調整の失敗と折損に起因しているものである。反時計回りの錯向剥離によって作業は進行し、基部形成を目的とした計画的な製作工程は認められない。

3は横長剥片を素材とした黒曜石製の凹基無茎鎌である。素材を横位に用いて、打面側と端部側に側縁を設けている。表・裏面に素材面を残置させ、背面右側縁の先端には調整を有さない。調整はいずれも浅く、密である。反時計回りの錯向剥離によって、先端を作出したのを最後に作業を終えている。

4はJ-8グリッドより出土した黒曜石製の凹基無茎鎌である。調整は浅く密であり、主要剥離面を残置している。左右側縁は内湾しているが、脚部においては外湾して交わる。形態を作出するための調整は腹面左側縁→腹面右側縁→背面左側縁→背面右側縁→背面基部→腹面基部の順で進行しており、基部形成を意識した製作工程であることがわかる。

5は黒曜石製の凹基無茎鎌である。左右側縁は直線状であり、脚部も直線的に交わる。側縁・基部とともに鋸歯状を呈し、調整は密である。形態作出を目的とした調整は先端形成→側縁・基部形成の順で進むが、表・裏の前後関係は不明である。先端においては、時計回りの錯向剥離によって作業が進行している。

6はI-8グリッドより出土した黒曜石製の石鎌である。断面は三角形を呈するが、表面に素材面と考えられる剥離痕を有することから、背面中央に鈍角の稜を有する剥片を用いたことがわかる。調整は機能部近辺に集中し、反時計回りの錯向状に剥離が進行している。稜上から右辺への調整は階段状剥離が顕著に発達している。

第2節 中世

中世の遺構は、B区では竪穴住居跡が1軒・C区では溝2条・土坑2基をそれぞれ確認し、それに伴って多数の遺物が出土した。竪穴住居跡は一部調査区外に延びているため、全体を検出することはできなかった。

(1) 竪穴住居跡（第9図）

本住居跡はB区の北東で、遺跡を乗せる小高い丘陵状の小山の上に立地している。標高は423m前後を測り、周囲には同時期の遺構は確認できず、単独で所在する。住居跡の北側は調査区外に延びているため、全体像を把握することはできなかった。方形で、現存する規模は南北約3.91m、東西約4.93m、深さ0.05~0.10mを測り、堀り込みは非常に浅い。カマドについては明確なものを確認することはできなかったが、南西コーナーに焼土を多量に含む堀り込みが存在したことから、この位置にカマドがつくられていたと推測できる。またそれに伴い、拳大から人頭大の礫、壊片等が出土した。柱穴は北東コーナーと南西コーナーに合計3基を確認した。いずれも直径約0.25m前後、深さ約0.45m前後を測る。床面は中央付近に張り床が施されていた。床面は凹凸で硬化しており、所々焼土・細かな炭化物粒子が確認できた。また南東コーナー付近は地山面が削り取られており、明確な床面、ピット、壁等は確認することができなかった。

遺物は破片資料が多く、全体の様相を把握できるものはほとんどない。1は甕である。カマド付近からまとめて出土した。口縁部は平坦で、口唇部は若干肥厚する。体部外面は縦方向のヘラ削りにより調整されており、底部付近は指頭圧痕が施されている。内面は上半部をハケ、下半部を横方向のヘラ削りにより調整している。ハケは磨耗により不明瞭である。色調は赤茶褐色で、金雲母を多量に含む。2は南側壁付近より出土した杯である。ロクロ巻き上げにより整形されているが非常に粗い作りになっている。色調は赤黒褐色で金雲母を含む。内面には円形にススが付着している。おそらく灯明皿に用いられたものであろうか。3は内耳土器であると思われる。第1号ピットより出土した。外面は縦方向の、内面は横方向のヘラ削りにより調整されている。第1号ピットからは他にもいくつかの土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。遺物を出土する性格上貯蔵穴である可能性も否定できない。これらの遺物から本住居跡は13世紀に位置づけることができよう。

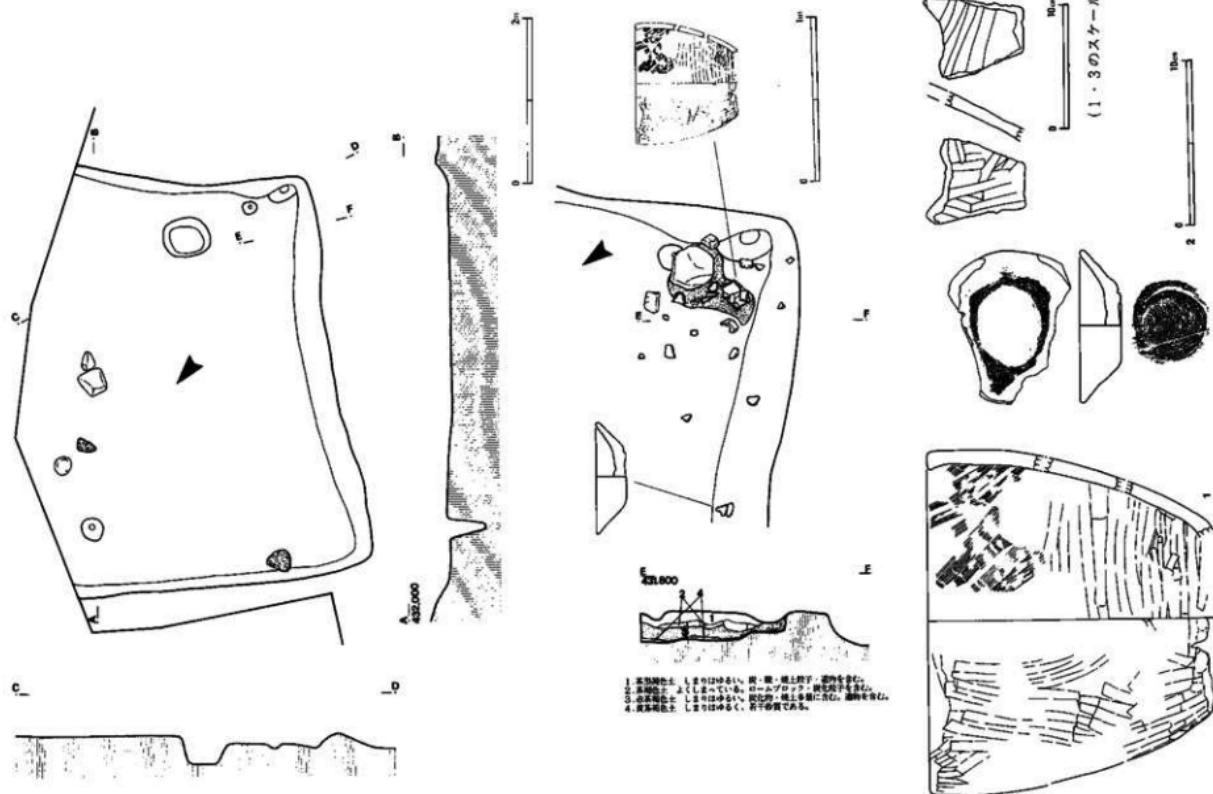
(2) 土坑（第13図）

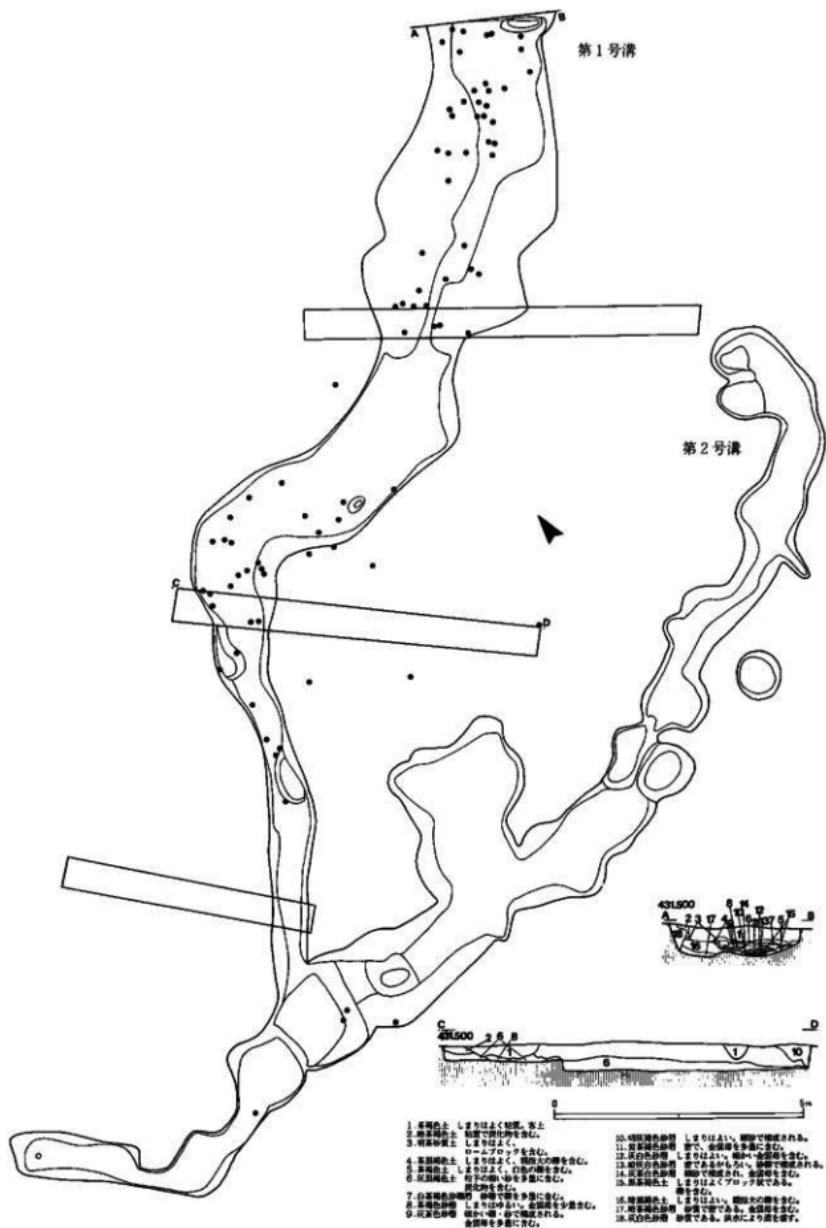
第1号土坑 本土坑はC区北側H-22グリッドに位置する。第2号土坑の西側に位置しており標高431m前後を測る。長径約1.05m、短径約0.75m、深さ約0.15m前後を測り、楕円形を呈する。掘り鉢状を呈しており、立ち上がりは上部へいくほど緩やかである。

出土遺物はそれほど多くはない。1は内耳土器の口縁部であり、ススが多量に付着している。口唇部は内湾し、つまみ上げられており、端部には沈線がめぐる。体部外面は縦方向のヘラ削りが施されている。内面はハケによる調整が施されているが、磨耗が著しく、単位を明確に把握することはできない。2は杯の底部である。回転糸切り痕が確認できる。3は銭貨である。銘はきわめて不鮮明であるが、「元豊通宝」と読める。直径2.35cm、重量は1.60gを測る。元豊通宝は1078年に北宋で初めて铸造されるが、中世末から近世初頭にかけて最も多く模倣されたものの一つである。その他小片で図化することはできなかったが、陶器片が出土している。内面に釉が施され、白黄褐色を呈する。器種は不明である。

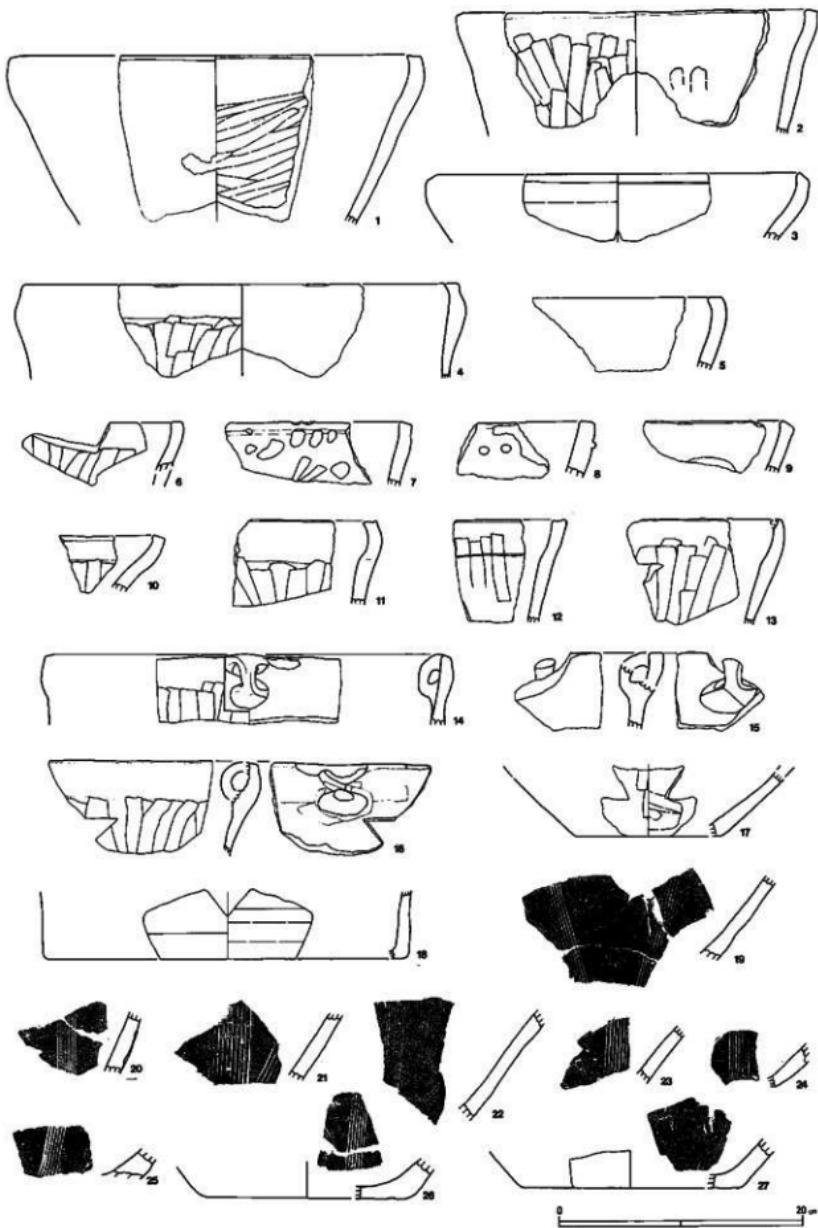
第2号土坑 本土坑はC区北側H-22グリッドに位置する。第1号土坑の東側に位置しており、標高431m前後を測る。長径約1.50m、短径約0.75m、深さ約0.20mを測り、細長い楕円形を呈する。堀り込みは浅く、集石状を呈する。礫を含む下層は焼けており、炭化物が多量に出土した。遺物の出土はほとんど認められなかったが、これら2基の土坑の周辺には中世の遺物が出土しており、本土坑も該期のものであると考えてよいと思われる。

第9図 第1号住居跡

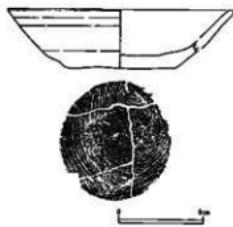




第10図 1・2号溝



第11図 溝出土遺物(1)



(2) 溝 (第10図)

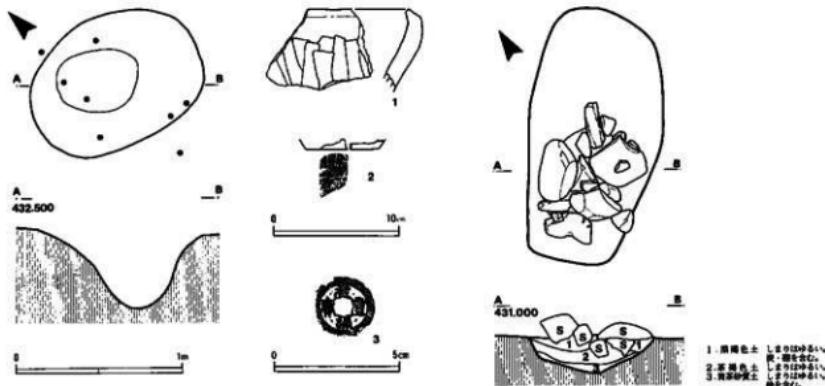
溝の掘られた一帯は層位より、溝が掘られる以前から鉄砲水等の洪水に見舞われていたと思われる。付近は多量の礫、砂等で覆われており、それらに混じって磨耗の少ない内耳土器や杯等の破片が出土した。

溝は2条が確認された。第1号溝は南北に、調査区外から延びていると思われ、下流で次第に細く浅くなりながらJ-23グリッド付近で第2号溝と合流する。全長は現状で25m前後、最大幅3.5mを測る。ほぼ全域に磨耗の少ない内耳土器片や杯片を含むがそのいずれも接合できるものはほとんどない。

第12図 溝出土遺物(2)

第2号溝は北西から南東に向かって延びており、H-25グリッド付近で自然に始まり、K-22グリッド付近で終わる。全長は約20mを測る。壁面・底面は凹凸が著しく、蛇行しており、溝内は拳大の礫で充填されていた。また底部付近は炭化しており、礫には多量の炭化物が付着していた。遺物はほとんど含まず、わずかに内耳土器片が2点出土したのみである。このような状態からこれら2条の溝は若干性格が異なっていると思われる。

第11・12図は第1号溝及びその周辺の礫層から出土したものである。いずれもほとんど接合できるものではなく、全体像を知ることのできるものは存在しない。第11図1から18は内耳土器である。そのほとんどは外側にススが付着しており、色調は灰茶褐色を呈する。胎土には金雲母を含む。調整は外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向にナデが施されている。14~16は内耳を持つものである。内耳は付設部分をヘラ削りにより調整した後に、太い粘土紐を添付している。17・18は底部付近の破片である。17は底部立ち上がり直後から外反する楕形のものであり、18は直に立ち上がる通常の内耳土器に見られる形態のものである。19~27は振り鉢である。内耳土器とほぼ共通の胎土であり、外面は輪積痕を残すものも見られる。内面はヨコナデによる調整の後に条線を施す。19・21は唯一一条線の間隔を知ることができるものである。口縁部の様相については不明である。第12図1は杯である。杯は唯一の出土である。G-24グリッドの溝内より破片で出土した。ロクロにより成形されている。



第13図 土 坑

第3節 江戸時代

江戸時代の遺構は、A区で4基、B区で15基の合計19基の墓坑が確認された。このうちA区の墓坑については既存の道沿いにある墓石の存在により偶然検出できたものであり、B区の墓域とは直線距離にして約45mの距離を測る。B区では15基中12基が一ヵ所に重複して認められた。墓域周辺の畠境の石垣にはこれら墓坑に対応すると思われる墓石が含まれており、試掘時から近世墓の存在が予測されていた。

(1) 石垣

墓域の周辺には畠境の石垣がL字状に所在し、その石垣を構成する礫の中には墓石4基、墓石の台座2基等が存在する。これらの墓石の銘文から最も古いものは元禄6年(1693年)、新しいものでも文化4年(1807年)の年代が確認できる。また石垣の中には矢穴を持つものが複数見られ、これらは接合関係にある。石垣を構築するために調達された石材はこの場所で石垣用に加工されたと推定できる。石垣の北側、つまり石垣より一段高い範囲一帯には江戸時代中期の陶磁器片及びかわらけ片が多数出土している。このためこれら石垣がもともとは調査区北側の道に面する屋敷の裏手に作られたものであった可能性を否定できない。

(2) 近世墓(B区)

B区では第1号墓から第15号墓までの墓坑が確認された。このうち第2号墓と第3号墓はその境で重複しており、2体の人骨を確認した。また第4号墓から第15号墓の12基の墓坑は複雑に重複しながら存在した。

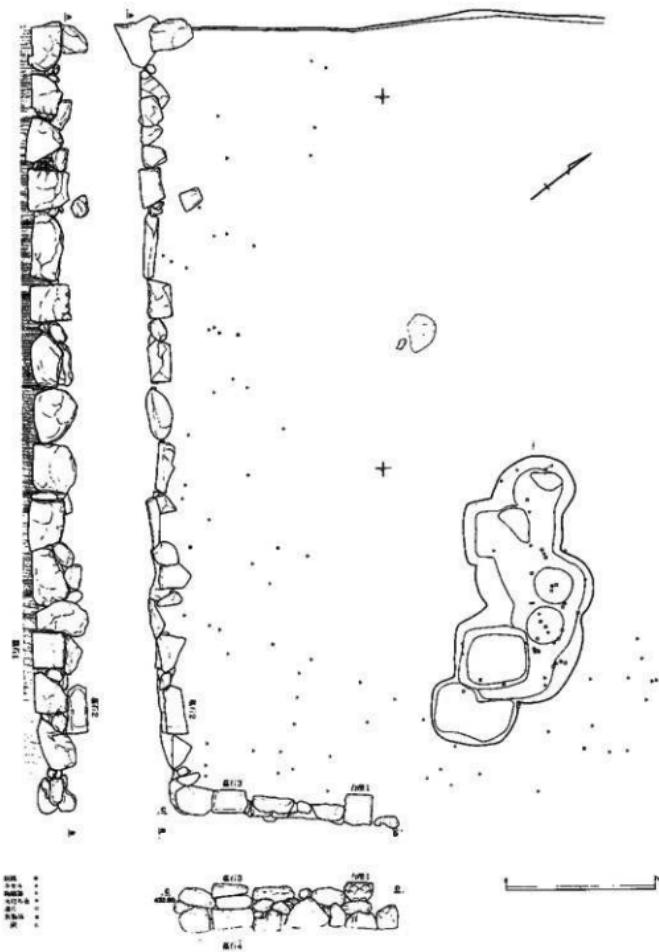
第1号墓(第15図) 第2・3号墓の西側、J-19グリッドに所在する。南北0.75m、東西0.82m、深さ0.37mを測る。人骨や副葬品を認めることはできなかったが、地山直上の土層は真っ黒に有機化しており、墓坑である可能性がきわめて高い。有機化した土層と覆土との間には25cm四方の扁平の礫が出土した。

第2・3号墓(第15図) 第1号墓の東側で、第4～第15号墓の北側に位置する。現状で南北2.58m、東西0.96m、深さ0.68mを測るが、人骨の出土状況や堀り込みの様子から、第2号墓は推定で長径1.10m、第3号墓は長径2.45m程度であると思われる。第2号墓からは床面直上より人骨頭部のみが出土した。人骨頭部の出土地点はピット状に浅く堀り込みが認められた。

第3号墓からは歯と、体を構成する太い骨4本、その他銭貨5点が出土した。銭貨は全て「寛永通宝」の銘をもっており、裏面にはなにも施されていない。歯の周囲には多数の骨片が散っていた。

第4号墓～第15号墓(第16図) 第4号墓から第15号墓は複雑に重複しながら所在するが、それらは出土地によりおおよそ3グループに分けることができる。すなわち墓域の西側に所在する4号墓・7号墓・12号墓・13号墓・15号墓、墓域中央に所在する8号墓・10号墓・11号墓、墓域の東側に所在する5号墓・6号墓・9号墓・14号墓である。このうち西側のグループは層位的な観察から15号墓→13号墓→7号墓→4号墓→12号墓の順番に墓が造営されたことを知ることができる。また同様に中央のグループは11号墓→8号墓の順番で、さらに東側のグループは14号墓→9号墓→5号墓→6号墓の順番でそれぞれ造営されていた。以下にそれぞれの墓について詳細を述べていく。

4号墓は最も重複関係の認められた西側のグループに属するもので他の墓にはほとんど壊されず、検出することができた。平面形態はほぼ円形で、南北0.69m、東西0.62m、現状での深さは0.50mを測る。平面確認時には朽ち果て土壌化した棺桶の跡がくっきりと確認でき、断面観察時には棺桶の厚さを知ることができた。棺桶の底部には粘質で黒灰色の有機化した土層が10cm前後堆積し、その土層中より骨片・キセルの雁首部及び吸口部・陶器片・銅錢1点が出土した。骨片はほとんど原型をとどめておらず、残存状況は良好とはいえない。第16・17図1～9は出土遺物である。1は六道銭に用いられたと思われる銭貨である。表面には「寛永通宝」の銘が見られる。2はキセルの雁首部、3は吸口部である。雁首部には若干の布片が付着しており、副葬時には布に包れていたことを推測することができる。4は陶器で広口の碗である。内外面には黄茶褐色の釉が施される。器高は現存で4.1cm、口径は推定18.0cmである。产地は美濃であると思われる。5は磁器製の小型碗であ



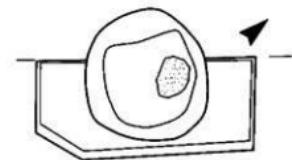
第14図 石垣及び周辺遺物出土状況

る。器高は現存で3.3cm、口径は11.0cmを測る。胎土は灰褐色を呈し、灰色の釉が施される。6は磁器茶碗の口縁部破片である。外面には二重網目文が内面には一重網目文が施される。胎土は白色で密である。7は陶器片で口径は12.2cmを測る。口縁部は外側に大きく開く。黄茶褐色の釉が施される。8は磁器製の茶碗であり、口縁部を欠損する。器高は現存で3.8cm、底径は4.6cmを測る。外側底部付近には一重の線文があり、系尻には二重の線文がめぐる。胴部にはコンニャク印判によると思われる菊花が施される。9は陶器製のかけ分け茶碗の底部である。残存する器高は2.2cm、底径は約4.3cmであると思われる。内面には灰釉が、外面には黒茶褐色の鉄釉が施される。胎土は黄茶褐色で密である。製作年代は18世紀後半から19世紀に求められ、産地は瀬戸美濃系であろう。なお、4号墓は他の墓の覆土を用いていると思われ、従って4から9の陶磁器片がすべて4号墓に伴うものであるとは考え難い。

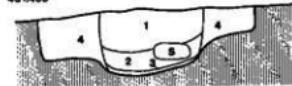
5号墓は東側グループの最も上層に立地したものであるがすでに6号墓に埋されていた。円形で、現状では南北0.40m、東西0.47m、現状での深さは0.42mを測る。4号墓と同様に断面には棺桶が腐食した状態で検出され、底部には粘りのある黒色土が堆積していた。覆土及び黒色土層中からは多量の骨片、キセル・陶磁器片等が出土した。銭貨は合計で6枚が出土しているが、それぞれが互いに付着しており、図示できたものはこのうちの1点のみである。1は銅錢で、「寛永通宝」の銘が施される。六道銭に用いられたものであろう。2はキセルの雁首部である。内部の木質片も残存していた。3は箱形の湯呑み茶碗である。残存高は4.8cm、口径は6.6cmと推定される。外面は七宝繫文、内面口縁部付近には四方櫛文が施される。磁器製で製作年代は19世紀初頭である。4は陶器製の端反挽である。残存高は4.4cm、口径は約10.0cmを測る。内外面とともに水裂文で、灰褐色を呈するが、底部付近には施釉されていなかったようである。胎土は白乳色を呈する。19世紀の製作である。5は器形不明の磁器片である。頸部付近であると思われる。6は磁器製の仏飯具である。杯部と底部が残存し、脚部は欠損する。器高は推定で6.9cm、口径は7.0cm、底径は5.2cmを測る。外面は梅花繫文が施される。胎土は白乳色で密である。7・8は磁器製の徳利である。器高・口径等は不明であり、外面の模様も不明である。これら3~8の磁器類は4号墓の遺物と同様に覆土から検出された。それ以前に築造された墓類に副葬された遺物を含んでいると思われるため、5号墓に伴うものであるかは不明である。

6号墓は5号墓の西側に接して検出された。6号墓底面附近からは地山に含まれる扁平の大礫が頭を出しており、埋葬時にはこの礫の上に棺を安置したと思われる。ほぼ円形を呈すると思われ、南北0.69m、東西0.57m、深さ0.80mを測る。周辺からは多数の骨片や歯、毛髪等が出土した。また、副葬品としてキセルや火打金、六道銭に用いられたと思われる「寛永通宝」の銘を持つ銅錢等が出土した。第17図1は銅錢である。5~6枚の銅錢が劣化のためまとまって付着しており、正確な数を知ることはできない。最上部に位置するもののみ「寛永通宝」の銘を確認することができた。2はキセルの雁首部である。木質部を若干残す。3は吸い口部である。吸い口の部分は欠損しており、布片が若干付着している。4は火打ち金で、縦2.20cm、最大幅5.25cm、重さ16.00gを測る。5は水晶片で、4とともに出土した。火打ち石であると思われ、何カ所か割れており、すり面が観察できる。4と5は木箱に納められていたと推測される。

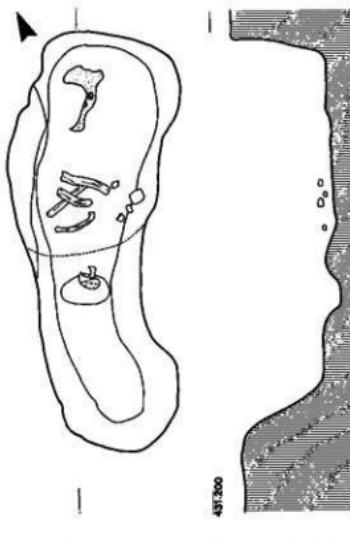
7号墓は4号墓の下層より確認した。四角形の形状を呈し、



431400



1号墓



431200

2・3号墓

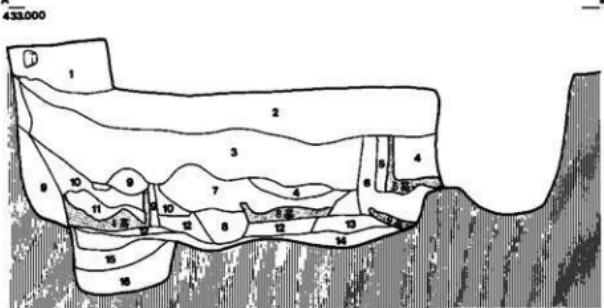
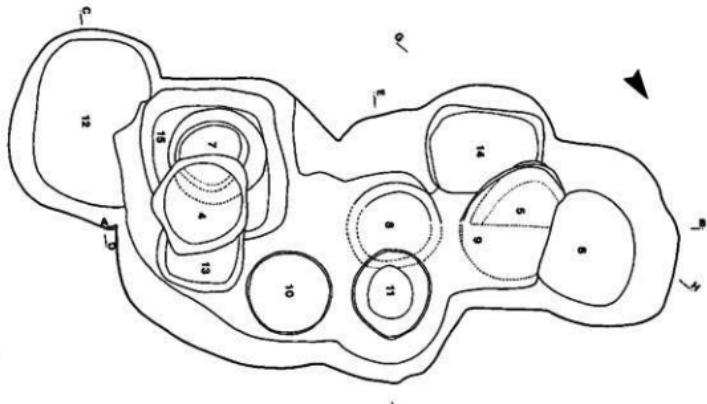
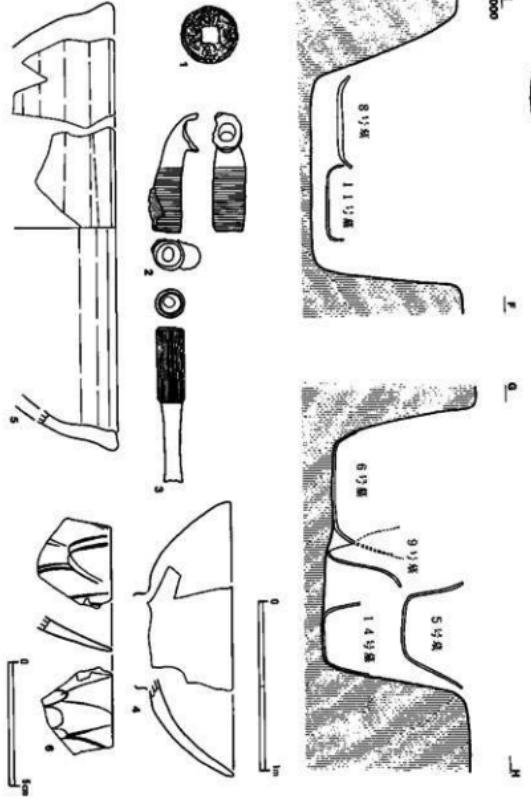


0 5cm

第15図 1~3号墓

第16図 4～15号墓及び4号墓出土遺物

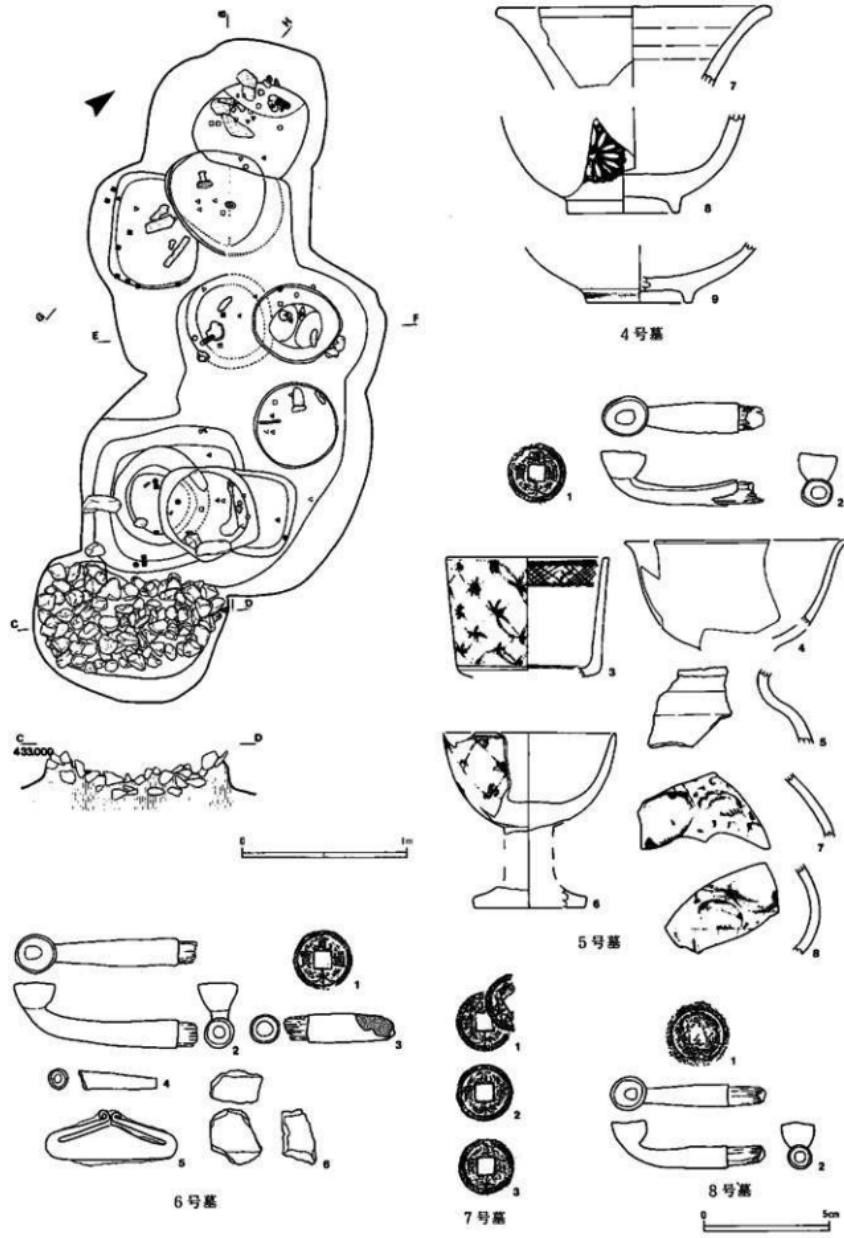
— 23 —



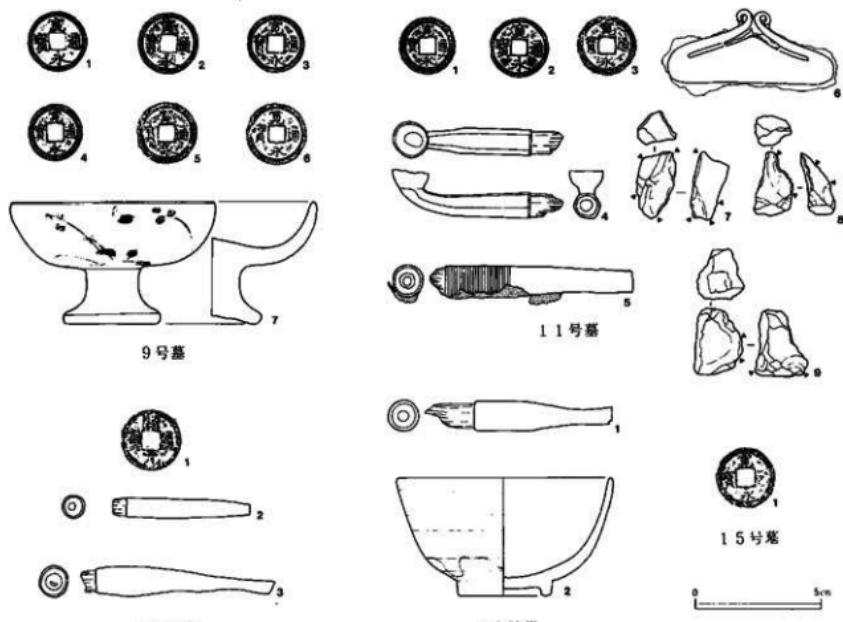
1. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。
2. 灰褐色粘土。しづらはよく、やわらかである。
3. 水成粘土。しづらはよく、堅いのである。
4. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。
5. 灰褐色粘土。しづらはよく、砂質である。
6. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
7. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
8. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
9. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
10. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
11. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
12. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
13. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
14. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
15. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。
16. 灰褐色粘土。しづらはやく、砂質である。

17. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。
18. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。
19. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。
20. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。

21. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。
22. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。
23. 灰褐色粘土。しづらはやく、堅密を含む。



第17図 遺物出土状況及び4～8号墓出土遺物



第18図 9～15号墓出土遺物

南北0.55m、東西0.50m、現存する深さは0.17mである。4号墓と重複していたため、墓のほとんどがすでに壊されていたが、北側のわずかに重複していない部分より5点の銅鏡が出土した。第17図1～3は銅鏡で、全て「寛永通宝」の銘が見られる。このうち1は2点が付着するものである。いずれも遺存状況は良好とはいえない。

8号墓は墓域中央部の上層に位置する。平面形態は円形で、墓坑の範囲は推定で南北0.53m、東西0.57mを測り、深さは約0.28mであると推測される。棺桶底面部分には有機化した黒色土が約15cm堆積しており、そこからは骨片等が多数出土した。また覆土は他の墓坑と比べて浅かったが、覆土上層部からは漆塗り椀2点・キセル雁首部・銅鏡等が出土したが漆塗り椀は2点とも漆部のみが残存しており、木芯部はすでに残存していなかったため、図示することはできなかった。第17図1は銅鏡で「寛永通宝」の銘が見られるものである。銅鏡は3点が出土したが、全て付着しているため、最も外側の1点のみ図示できたにすぎない。2はキセルの雁首部である。木質部をわずかに残す。

9号墓は東側グループに属し、5号墓の20cmほど下層で検出した。また、東部分を6号墓に壊されていると思われる。そのため墓のほとんどが破壊を受け、底面付近にわずかに残っていた遺物のみを確認した。9号墓は円形を呈すると思われるが、破壊のため4分の1程度を検出したにすぎず、具体的な大きさは不明である。第18図1から7は9号墓より出土した遺物である。1～6は「寛永通宝」の銘を持つ銅鏡である。7は磁器製の仏飯具である。器高4.6cm、口径8.6cm、底径3.8cmを測る。杯部外側には秋草文が施される。底面の施釉は見られず、胴部にも一部施釉されていない箇所も見られる。

10号墓は7号墓の東側で、11号墓の西側に単独で所在する。平面形態は円形で南北0.51m、東西0.53m、現行での深さ0.15mを測る。骨片、歯等の他、キセルの雁首部・陶磁器片等が出土したが、図示できるものは存在し

なかたった。

11号墓は8号墓の下層より出土した。南北に多少長い楕円形を呈し、南北0.52m、東西0.48m、現行での深さ0.15mを測る。墓坑上部には人頭大の礫が所在し、礫を取り去ると多数の人骨片及び残存状態の良好な状態で歯が検出された。また、それらとともに銅銭8点・火打ち金・漆塗り椀・キセル等が出土した。1～3は銅銭である。「寛永通宝」の銘が見られ、他5枚は重なっているため、図示することはできなかった。2はキセルの雁首部である。木質片が若干残存していた。3はキセルの吸い口部で布片が付着していた。4は火打ち金である。縦3.50cm、幅6.95cm、重さ25.80gを測る。また6～9は水晶製の火打ち石である。火打ち金とともに布かもしくは袋状の入れ物に納められていた可能性がある。実測図中の▲で示した部分は使用痕の観察できる部分である。

12号墓は現地表面に礫が集中的していたために確認できたものである。礫集中範囲は東側半分を表土はぎの段階で欠損しているが、南北は1.10m、現状で東西は0.81m、深さ0.60

mを測る。礫の下層部分には掘り込みを持ち、キセルの吸い口部2点、及び銅銭1点が出土した。また表土剥ぎ時にこの付近から残存状況の良好な人骨頭部が出土しており、これらは12号墓のものであると思われる。しかし墓の掘り込みが浅いなどの疑問点が残る。1は「寛永通宝」の銘を持つ銅銭である。2・3はキセルの吸い口部である。ともに雁首部を欠損している。

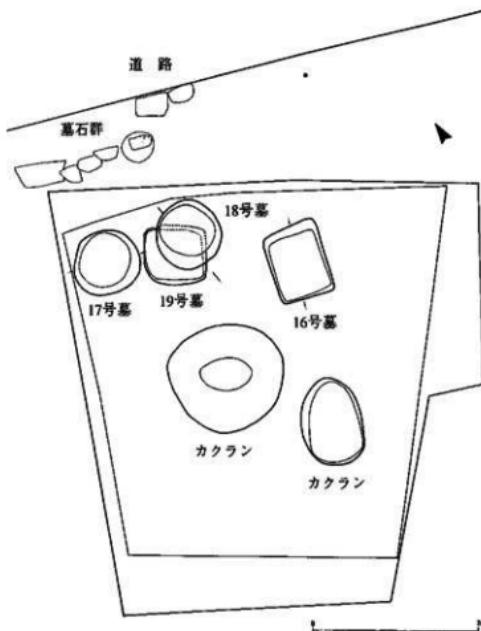
13は4号墓及び7号墓の下層より確認した。円形を呈し、南北0.60m、東西0.60m、現行での深さ0.42mを測る。4号墓、7号墓により墓のほとんどが壊されており、全体の様相を知ることはできなかった。出土遺物は人骨片が中心で、副葬品にはキセル吸い口部・銅銭5点・陶器製茶碗等がある。銅銭は5点が鏽により付着しており、表面の銘すら読みとることはできなかった。第18図1はキセルの吸い口部である。木質部を若干残す。2は陶器製の茶碗である。器高4.6cm、口径8.2cm、底径3.8cmを測る。胎土は黄茶褐色で密であり、白乳色の釉がかけられているが、底部付近には施釉されていない。産地は瀬戸であると思われる。

14号墓は5・8・9号墓の南側で確認された。四角形を呈し南北0.48m、東西0.70m、深さ0.50mを測る。棺桶を構成していたと思われる釘片が棺桶を取り囲むように出土した。内面底部付近には黒色土が堆積しており、その中からは骨片、陶器片、キセルの木質部等が出土した。いずれも図示できない。

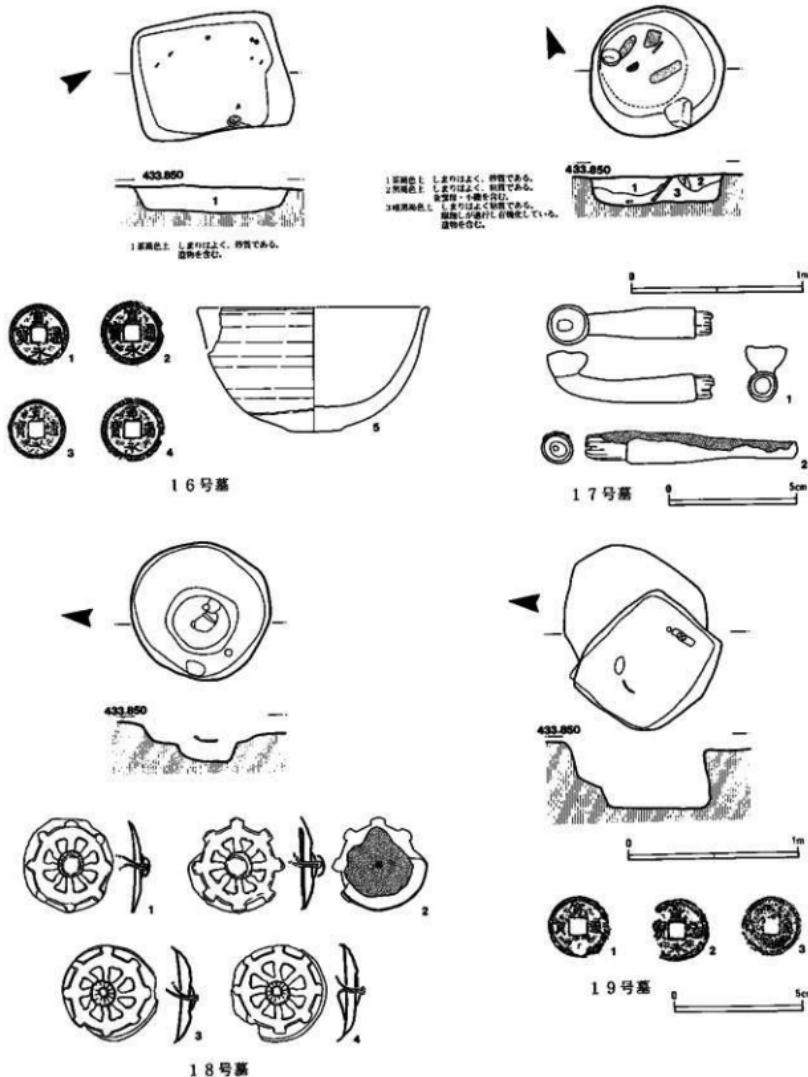
15号墓は4・7・13号墓の下層より確認された。棺桶の痕跡は確認できず、掘り方を検出したにすぎない。掘り方周辺で数点の釘片が出土した。掘り方は方形を呈し、現状で南北0.95m、東西0.90m、深さ0.60mを測る。遺物は東側壁際より銭貨1点が出土した。

(3) 近世墓（A区）

A区の近世墓は合計4基が確認された。調査区北側の既存の道路沿いには石塔4点が既に存在しており、墓



第19図 A区墓坑配置図



第20図 16~19号墓

坑はそれらの南側でまとめて出土した。石塔の周辺には供養に用いられたと思われる江戸時代中期の磁器片等も出土した。以下に詳細を述べる。

第16号墓 調査区の最も東側に単独で所在する。掘り方は方形を呈し、南北0.88m、東西0.68m、現状での深さは0.18mを測る。墓全体から細かな骨片が出土した。また、南東壁際より陶器が、北側壁付近より銅鏡7点がまとめて出土した。第20図1~4は銅鏡である。いずれも「寛永通宝」の銘が認められる。銅鏡7点のうち

4点は付着しており、図示することは不可能であった。5は陶器製の碗である。口径9.2cm、器高5.8cm、底径1.9cmを測る。口縁部から底部にかけて鉄釉が施されているが、胴下半部から底部にかけては施釉されていない。

第17号墓 調査区の最も西側に位置する。掘り方のみを検出した。円形を呈し、南北0.76m、東西0.87m、現状での深さ0.15mを測る。墓坑中央から骨塊及び歯が出土した。それに伴って、キセル・漆塗り椀が出土した。漆塗り椀は墓坑の西壁付近で出土した。小型で、朱色の漆が施されていたが、漆部のみが残存し、木質部は非常にろくなっているため、図示することは不可能である。第20図1はキセルの雁首部である。木質部が若干残存する。2はキセルの吸口部である。布片が付着している。

第18号墓 19号墓と重複しており、東側に16号墓が、西側には17号墓がそれぞれ立地する。円形を呈し、ほぼ中央にピット状の掘り込みが存在する。南北で0.87m、東西で0.80m、現状での深さは約0.25mを測る。ピット状の掘り込み内部より頭蓋骨片が出土した。また、上層より4点の飾り金具が出土したが、その用途については不明である。1～4は飾り金具で、2種に細別できる。

第19号墓 18号墓の下層に位置する。方形を呈し、長径0.75m、短径0.71m、確認面からの深さは0.40mを測る。墓坑全域で人骨片が出土し、南東壁面付近で木製の板状遺物の上部に銅錢3点が乗せられたような状態で出土した（第20図1～3）。銅錢には「寛永通宝」の銘が見られる。

（4）溝（第21図）

B区においては3条の溝跡が確認された。調査区は北から南へ傾斜している。南から中央部にかけては緩やかに傾斜しているが、中央部で傾斜変換点が見られ、この地点から北側へ向かってはやや傾斜がきつくなっている。溝は調査区の東部分に3条が並行して位置しており、いずれも北から南へ水が流れているようである。以下個々に詳細に触れていく。

第3号溝 3条の溝の中で最も西側に位置するものである。最大幅約2.0m、深さ約0.65～0.70mを測る。北から中央部の傾斜変換点までは傾斜は緩やかで大疊がいくつか存在する。傾斜変換点より南側にかけては底部は水流により所々複雑にえぐられているような状況である。また傾斜変換点付近には人工的に積まれたと考えられる石垣状の疊が所在する。出土遺物は縄文時代の土器等を含むが、江戸時代の所産と考えられる陶器製の播り鉢片や少量の磁器片、磨耗したかわらけ片等を含んでおり、江戸時代のものである可能性が高い。

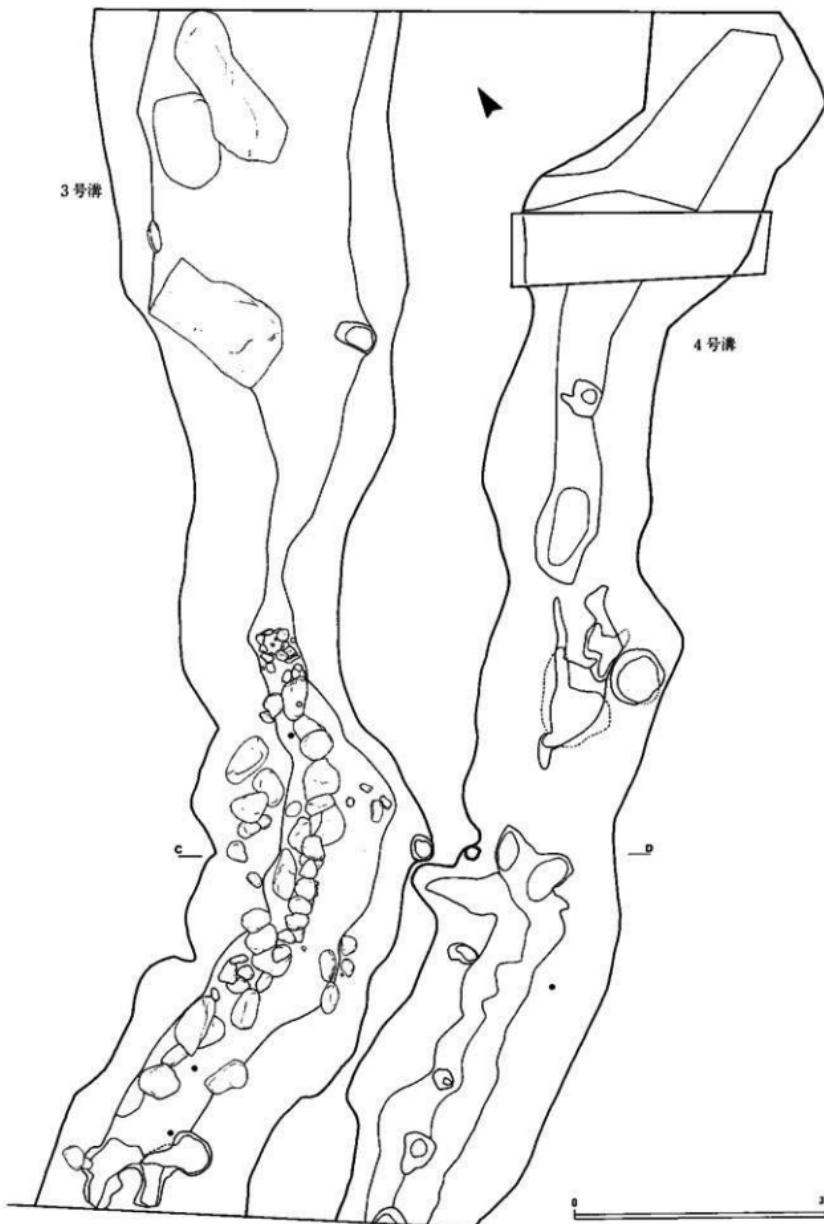
第4号溝 第1号溝の東側に位置する。最大幅約2.5m、深さ約0.40～0.50mを測り、形態的には1号溝と類似しており、北から傾斜変換点までは緩やかであり、そこから南側へは若干急傾斜になっている。そのため底面は凹凸が激しい。またこの地点からは磨耗した拳大から人頭大の疊が多数出土した。さらに1号溝・2号溝ともに第5層までは黄茶褐色の粘土層を中心とした土が堆積し、5層以下は砂質の疊層が何層にも細かく堆積する。長い時間の中でこれらの溝が次第に埋没していく様子を知ることができる。

第5号溝 第1号溝・第2号溝の東側で、B区の調査区東際で出土した。最大幅約1.50m、深さ約0.30mを測り、溝内に巨大な疊を含む。短期間に利用されていたらしく、複雑な堆積は見られない。遺物はほとんど出土しなかった。

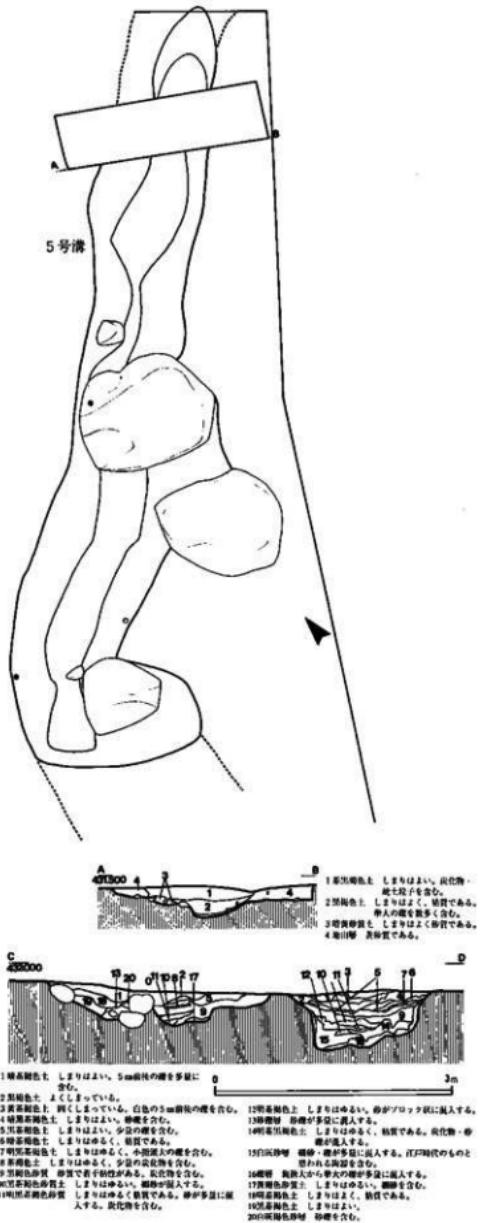
（4）包含層出土遺物

墓域の周辺からは陶磁器類の出土が数多く見られた。それらは墓に副葬されたものと考えるより、むしろ生活雑器としての色合いが強い。磁器は茶碗や皿・椀・湯呑み茶碗等の器種が、陶器は茶碗・甕・湯呑み茶碗・灯明皿・蓋・播り鉢などの器種が見られた。胎質年代はほとんどが18世紀後半から19世紀である。以下に個別に見ていく。

磁器類（第23図1～48） 1～11は茶碗である。1は広東椀の形状で器高6.7cm、口径11.2cm、底径6.0cmを測る。外面には蕉葉文が、内面は口縁部付近に二重圓線、底部付近に一重圓線、見込みには崩れた五弁花が施される。焼き継ぎの跡が見られる。18世紀後半から19世紀に製作されたものである。2は器高5.4cm、口径10.8cm、



第21図 3・4号溝

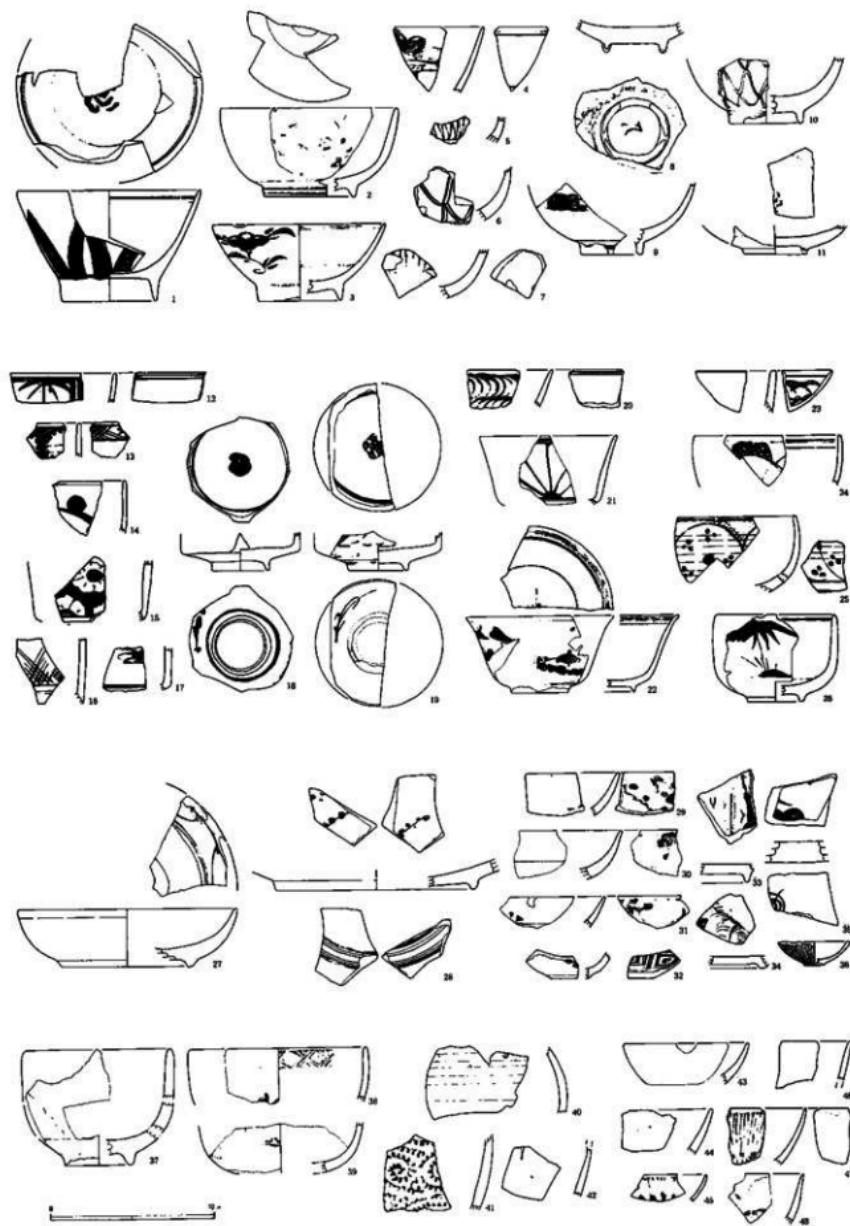


第22図 5号溝及びセクション図

底径5.6cmを測り、外面には染め付けにより梅花文が、高台内には一重圓線が施される。高台には砂が観察される他、内面見込み周辺には蛇の目剥ぎが認められる。年代は18世紀であると考えられる。3はA区石塔に供えられていたものである。器高6.7cm、口径11.2cm、底径6.0cmを測る。外面には花文が、内面には口縁部付近に二重圓線、底部付近には一重圓線が施される他、見込みにも施文があるようだが欠損しており不明である。5・6・10はいずれも二重網目文が施されるものである。10は底径4.6cmを測るがそれ以外は、いずれも破片のため詳細は不明である。胎土は灰白褐色で、密である。肥前系である可能性が高い。8は底部のみの出土である。残存高は2.0cm、底径は3.2cmを測る。高台内には「大明年製」の年号が記される。11は残存高4.2cm、底径3.3cmを測る。底部付近には二重圓線が、見込みにはコンニャク印判による五弁花が見られる。18世紀後半の所産である。

12~26は湯呑み茶碗である。このうち12~19は筒型、20~23は端反り型、24から26は丸型のものである。12は残存高1.8cmを測り、外面には竹林文、内面は二重圓線が施される。18世紀後半に見られる模様である。13は残存高2.1cmを測る。外面はコンニャク印判による雪輪文が、内面口縁部には四方擗文が施される。18世紀後半から19世紀の所産であると思われる。15は残存高3.8cm、体部外面には染め付けにより割花と波が描かれる。19世紀初頭の所産である。18・19はともに底部のみが残存し、見込み部分にはコンニャク印判による五弁花が施される。18は残存高2.3cm、底径3.6cmを測り、五弁花はかなり崩れた様相を呈する。19は残存高2.4cm、底径3.8cmを測る。22は器高4.5cm、口径9.0cm、底径3.4cm。25は残存高4.9cm、口径9.0cmである。外面には斜格子丸に弁花文が描かれる。生産年代は18世紀後半から19世紀初頭に限定される。26は器高7.0cm、口径9.2cm、底径4.2cmである。

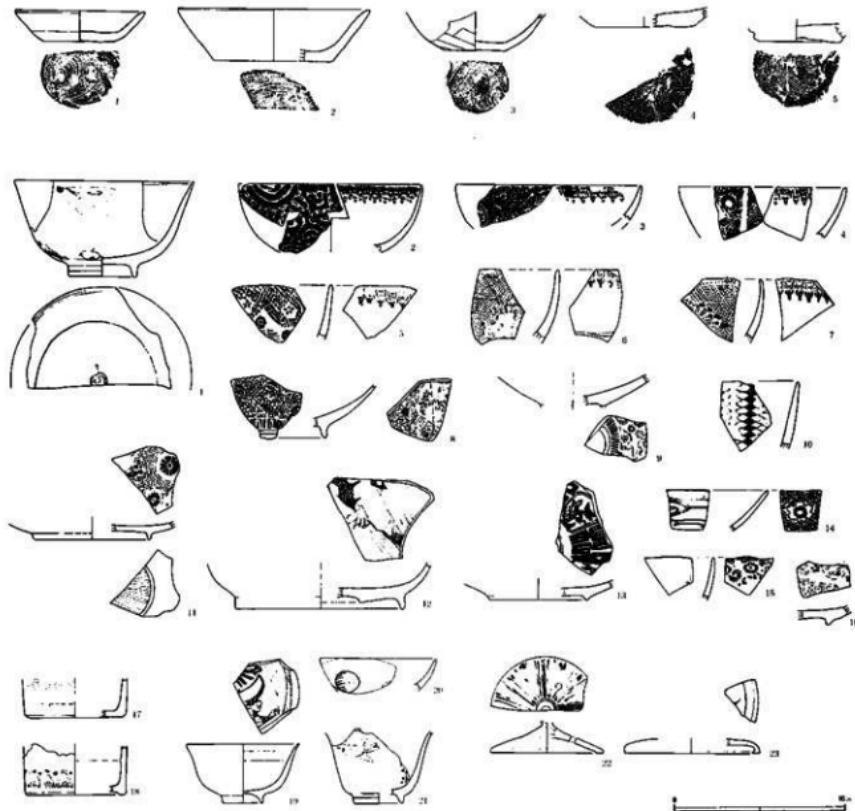
27から36は皿に分類できるものである。全体像を把握できるものはほとんどなく、破片



第23図 包含層出土磁器



第24図 包含層出土陶器



第25図 包含層出土かわらけ及び陶磁器

から当時の様子を窺い知るのみである。27は波佐見所産のものである。器高3.5cm、口径13.5cm、底径8.0cmを測る。内面には唐草が描かれ、底部付近は蛇の目剥ぎが施される。18世紀後半の所産であると考えられる。28は内面に藤が描かれる。残存高1.7cm、底径12.4cm前後を測る。36は紅皿で、器高1.4cm、口径2.4cm、底径1.2cmを測る。

37から48はこれらの器種に分類できないもの、もしくは器形不明のものである。37から39は小鉢状の器であると思われる。37は器高は推定で7.0cm前後、口径は9.2cm、底径は4.2cmを測る。器壁は厚く仕上げられており、胎土は灰白褐色である。高台には若干の砂が付着している。40から42はとっくりの破片である。41は蜻唐草文が描かれる。43から48は器形の不明なものである。46は残存高2.8cmを測り、コンニャク印判による菊花が施される。18世紀中頃の肥前系の所産であろうか。

陶器類（第24図49～90） 陶器類は磁器類と比較して器種のバラエティーに富んでいるが、全体的に出土量は少ない。その中で全体の様相を知ることができるものはほとんどなかったが、器種ごとに分類を行い、詳細について記していく。

49から54は碗類に分類できるものである。49は湯呑み茶碗である。残存高3.9cm、口径9.0cmを測り、外面は地

に黄褐色釉が施され、口縁部付近に白土の梅花文が描かれている。内面は白色釉がかけられている。美濃產と推定され、18世紀後半から19世紀にかけて生産されたものである。51は口縁部に灰釉が、体部下半部から底部までは鉄釉が施されるかけ分け茶碗である。产地は瀬戸美濃系に求められる。器高5.4cm、口径9.8cm、底径4.1cmを測る。52は黄茶褐色を呈する小鉢状の器である。残存高は5.5cm、口径11.0cmを測る。胎土は53・54は同じ系列の陶器であると思われる。いずれも美濃系のものであろうか。58は馬の目皿である。小片のため詳細は不明である。18世紀後半から19世紀代のもので瀬戸美濃で生産されたものと思われる。59は蓋のつまみである。残存高は1.2cm、径2.6cmを測る。60は蓋である。器高2.3cm、口径7.8cm、底径4.0cmを測る。内面には鉄釉が施され、外面は釉は施されない。内部中央に突起状のつまみがつけられる。61は鉢などに施される片口部分である。黄茶褐色の釉が施される。65・66は唐津製の陶器である。小片のため器形は不明である。74はとっくりの底部であると思われる。残存高2.7cm、底径6.8cmを測る。志土呂焼である可能性がある。

77から90は擂り鉢片である。擂り鉢は全体を把握できるものは出土しなかった。内面はヨコナデを施した後に条線を施している。口縁部及び底部破片を観察すると、様々な形態のものがあることを知ることができる。77から82は口縁部に位置するものである。77・78は口縁部が有段になるもの、79・80は口縁部の幅が狭く、79は有段になった口縁部が更に内湾するもので、端部の丸く仕上げられるもの、80は端部が平坦になるもの、81は口縁部が外側に折り返されるものなどが見られる。88・89のように底部は渦巻き状を呈するもの、90のように斜格子状を呈するもの等がある。

かわらけ（第25図） 1から5はかわらけ片である。いずれも包含層中及び試掘調査時に出土したものである。1は器高1.8cm、口径7.7cm、底径4.2cmを測る。2は器高3.1cm、口径11.4cm、底径6.9cmを測る。いずれも成形は粗い。3は残存高2.2cm、底径3.8cmを測る。体部にヘラケズリを施す。

近代の陶磁器（第25図） 調査区内からは紙型刷りや銅版刷りによる磁器や陶器等が出土した。これらは明治期に位置づけることができる。明治27年の遺跡周辺の地図には、調査区北側に位置する道路の南側に3軒の屋敷が所在している。これら包含層から出土した遺物及び試掘調査で出土した遺物はこのような屋敷に伴っていたと思われる。

1から8は磁器製の茶碗である。銅版刷りによるものがほとんどである。この時期に該当する遺物はほとんどが銅版刷りのものである。2は残存高4.0cm、口径11.0cmで、文様の重なっている部分が見られる。11から18は皿である。皿は内面には銅版刷りが施され、外面は五須で文様を描くもの（14）や、内面は同様で外面は花びら状の型を施し、口縁部も花びらを型取るものなど趣向が富んでいる。17・18は徳利の底部である。ここにも銅版刷りが見られた。19から21は猪口である。19は器高3.5cm、口径6.7cm、底径2.4cmを測る。内面のみ五須で文様が描かれる。21は体部に千鳥が描かれる。残存高4.4cm、底径4.8cmを測る。22・23は蓋である。22はつまみから放射状の染め付けが施される。上部には空気穴が施される。残存高1.8cm、最大径6.6cmを測る。23は蓋である。残存高は1.4cm、最大径は推定で8.0cmを測る。

伊保水遺跡金属製品觀察表

図 番号	種別	法量(cm)					重量 (g)	出土位置	備考
		タテ	ヨコ	厚	高	長			
13 3	錢貨	2.35	2.35				1.60	中世1号土坑	
15 1	錢貨	2.40	2.40				4.20	2・3号墓	
	2	々	2.45	2.45			4.10	々	
	3	々	2.35	2.35			4.00	々	
	4	々	2.40	2.40			4.40	々	
	5	々	2.40	2.40			4.00	々	
16 1	々	2.30	2.30				2.70	4号墓	
	2	煙管雁首				4.75	1.95	々	
							1.30	7.80	
	3	煙管吸口				6.25	1.15	々	
							1.20	7.80	
17 1	錢貨	2.35	2.35				15.40	5号墓	6枚付着
	2	煙管吸口				6.50	2.10	々	
							1.50	5.20	
	1	錢貨	2.35	2.35			16.70	6号墓	5~6枚付着
	2	煙管雁首				7.25	2.60	々	
							1.60	12.40	
	3	煙管吸口				4.50	1.10	々	
							1.20	3.90	
	4	煙管吸口				3.15	0.85	々	
							0.80	1.50	
	5	火打金	2.20	5.25			16.00	々	
	1	錢貨	2.35	2.35			3.70	7号墓	2枚付着
	2	々	2.30	2.30			2.00	々	
	3	々	2.25	2.25			1.60	々	
	1	々	2.50	2.50			12.30	8号墓	3枚付着
	2	煙管雁首				6.20	1.90	々	
							1.35	5.00	
18 1	錢貨	2.40	2.35				2.90	9号墓	
	2	々	2.40	2.35			2.10	々	
	3	々	2.30	2.30			2.70	々	
	4	々	2.25	2.20			1.90	々	

図	番号	種別	法量(cm)						重量 (g)	出土位置	備考
			タテ	ヨコ	厚	高	長	φ			
	5	錢貨	2.40	2.40					1.80	タ	
	6	タ	2.40	2.40					3.50	タ	
	1	タ	2.25	2.25					2.50	11号墓	
	2	タ	2.35	2.35					1.90	タ	
	3	タ	2.35	2.35					2.40	タ	
18	4	煙管雁首				6.75		1.90	11号墓		
						1.35		8.00			
	5	煙管吸口				8.30		1.50	タ		
						1.40		15.10			
	6	火打ち金	3.50	6.95					25.80	タ	
	1	錢貨	2.35	2.35					2.70	12号墓	
	2	煙管吸口				5.45		0.90	4.30	タ	
						0.90					
	3	タ				7.65		1.25	4.90	タ	
						1.15					
	1	タ				7.40		1.20	1.20	13号墓	
						1.20					
	1	錢貨	2.35	2.30					1.60	15号墓	
20	1	タ	2.40	2.35					2.30	16号墓	
	2	タ	2.50	2.50					3.10	タ	
	3	タ	2.30	2.30					2.10	タ	
	4	タ	2.50	2.50					3.50	タ	他に3点付着
	1	煙管雁首				6.50		2.20	17号墓		
						1.60		11.10			
	2	煙管吸口				8.30		1.25	6.30	タ	
						1.25					
	1	不明鉄製品	3.55	3.55	0.65				5.60	18号墓	
	2	タ	3.65	3.80	0.95				6.30	タ	
	3	タ	3.80	3.80	0.60				5.70	タ	
	4	タ	3.80	3.75	0.60				5.80	タ	
	1	錢貨	2.40	2.40					2.00	19号墓	
	2	タ	2.45	2.20					4.20	タ	
	3	タ	2.30	2.30					4.10	タ	

石塔銘文一覽表

番号	西暦	法量
石塔1	一七二二 一七一〇	正徳二七年 釋淨閑 平□□□
石塔3	一七六一	義春 法□釋 正定士
石塔2		釋淨□不退位 同會 釋兀妙□不退位
	一七三〇	享保十五年四月十一日 法名 各不退位

番号	西暦	法量
石塔4	一八〇七	寛翁 (側面)
石塔5	一八〇五 一八〇二	造當
	文化四年九月二十三日 积智教信士 积妙水信女 享和二戌七月八日	
	一六九三	
	(元) 楽六年 亥月廿六日 法名 釋淨 春不退位	文化二五年 积道祐信士 (側面) 閑□月□□

第4章 出土人骨報告

聖マリアンナ医科大学解剖学教室

平田和明・星野敬吾

2、3号墓 男性 成人

長骨の骨体部片がいくつか残存する。保存状態は極めて悪く、大腿骨片と脛骨片は推定できるが、他は部位不明である。大腿骨後面の粗線の発達している様子から、男性である可能性が強い。

3号墓 性別不明 熟年

頭蓋冠と思われる骨片が残存するが部位は不明である。その頭蓋腔に相当する部位に関節面を伴う骨塊が付着しているが部位の特定は不可能である。上顎切歯4本および左上顎の犬歯、上顎第一大臼歯、下顎小白歯らしきもの4本の計10本である。咬耗度はMartinの2度に達しており、ある程度の年齢（熟年）に達していたことをうかがわせる。

4号墓 性別不明 熟年

すべての骨片が細片となっており、部位同定などは不可能。焼かれた骨片がいくつか確認できた。その他、およそ20個の歯冠片が確認できた。同一歯の重複はなさそうなので、一個体分であろう。咬耗度はMartinの2度に達しており、熟年と思われる。上顎第二大臼歯の咬合面に軽度の齶歯が認められる。

5号墓 性別不明 壮年

頭蓋骨片と長骨の一部と思われる骨片が残存する部位の特定は困難である。長骨は大腿骨である可能性が高い。頭蓋は矢状縫合一部と推定される部分が観察されるが、外板の骨結合化は認められない。歯冠片が4個残存する。犬歯が2個、小白歯が1個、大臼歯が1個である。犬歯は右上顎と左下顎、小白歯は左下顎第一小白歯、大臼歯は左下顎第一大臼歯と推定される。咬耗度は、小白歯・大臼歯でMartinの1度を示し、犬歯の尖頭ではわずかに象牙質が露出する。以上の所見から、この個体は比較的若い（壮年程度）可能性が強い。

6号墓 男性 壮年

頭蓋骨・四肢骨ともに、保存状態が悪く細片化しているため部位の同定などは不可能である。遊離歯はよく残っていて、28本が確認できる。歯冠部だけのものが多いが、上顎の小白歯が1本と第三小白歯が3本欠損するだけである。咬耗度は弱く、Martinの1～2度である。歯冠の大きさはやや大きめで、男性である可能性を示唆する。

7号墓 性別不明 成人

焼骨を含む少量の骨片と歯冠片が1個残存する。骨片は頭蓋片や四肢骨らしいが部位は同定不可能である。歯冠片は右上顎第二大臼歯と推定される。咬耗度はMartinの1度である。

8号墓 性別不明 成人

少量の骨片と歯が残存する。歯は、上顎切歯4本、犬歯2本、上顎小白歯1本、下顎切歯2本、下顎小白歯3本、計12本である。咬耗度はMartinの2度に達する。上顎切歯にシャベル状形質がやや強く見られる。

9号墓 性別不明 壮年

部位同定不可能の長骨骨片が少量残存する。その他に歯が残存する。いずれも歯冠部のみで、上顎中切歯1本、犬歯4本、上顎小白歯3本、上顎小白歯1本（左第一と推定）、下顎切歯1本、下顎小白歯2本、下顎大臼歯1本、計13本が確認できる。咬耗度はMartinの2度である。

10号墓 性別不明 成人

少量の骨片が残存。寛骨臼の一部かと推定される。焼骨片を含む。

11号墓 性別不明 年齢不詳

頭蓋骨を含む少量の骨片が残存するだけである。

12号墓 性別不明 成人

頭蓋骨、長骨、短骨の一部と推定される骨片が少量残存。焼骨片を含む。歯冠片が2個確認できた。左上顎大臼歯（第三と推定される）と下顎大臼歯である。上顎大臼歯は咬耗度が弱くMartinの1度にとどまるが下顎大臼歯は2度に達する。

13号墓 性別不明 成人

頭蓋骨、長骨、短骨の一部と推定される骨片が少量残存。焼骨片を含む。歯冠片が2個確認できた。下顎第一小白歯と下顎大臼歯で、咬耗度はMartinの2度である。

14号墓 性別不明 成人

多数の四肢骨片が残存。部位の同定は不可能。

15号墓 性別不明 成人

肩甲骨と思われる少量の骨片と、犬歯の歯冠が1つ残存するだけである。

16号墓 性別不明 成人

腓骨骨体片と上腕骨骨体片が残存する。他に部位同定不可能の骨片が少量残存する。

17号墓 性別不明 壮年

部位同定不可能の骨片が少量残存する。その他に歯が23本である。上顎切歯1本、犬歯4本、上顎小白歯4本、下顎切歯3本、下顎小白歯3本、下顎大臼歯4本である。咬耗はそれほど強くなくMartinの1～2度である。

その他

「廃土」の中に、比較的残りの良い頭蓋骨片が残存する。

一個体分 男性 成人

前頭骨・頭頂骨・後頭骨が縫合部を含めて残存するが、冠状縫合部・矢状縫合部は内板・外板とともに骨結合化が認められないが、ラムダ状縫合部では内板で骨結合完了、外板でも半ば程度骨結合化している。他にも左側頭骨の乳突部から頬骨突起にかけての部分が残存する。乳様突起は大きい。以上の所見から成人男性一個体分であると思われる。

第5章 まとめ

本遺跡では縄文時代前期末の土坑10基、中世の住居跡1軒、土坑2基、溝2条、近世の墓坑19基などを確認した。いずれも遺跡の一端を確認したにすぎず、集落跡や屋敷跡などまとまった遺構群をとらえたわけではないので、遺跡の性格やあり方などについては明瞭ではない。しかしながら、これらから得られた成果や発掘調査の中で気づいたことなどについて、ここでは若干はあるが記しておきたいと思う。

縄文時代前期末の土坑はB区でまとまって確認された。B区は北から南へ緩く傾斜しており、土坑群はこの緩斜面上に営まれていた。規模差はあるものの、いずれも該期の土器片が複数包含されている。これらはほとんど接合関係はない状態であり、全体の様相を窺うことのできるものは皆無であった。しかし第2号土坑のみは遺物の出土状態などから、性格を異にするものと思われる。このようにこれら土坑の性格は不明瞭であるといってよい。これらに加えてH-8グリッド周辺からは該期の遺物が特に集中して出土していることも興味深い。本遺跡より直線距離にして北約500mに位置する獅子之前遺跡では縄文時代前期末の諸碑b式期の住居跡等が確認されている。これらの成果を考え合わせて、縄文時代前期末においてはこの地域はかなり広範囲にわたって人々が生活を営んでいたことを知ることができる。

中世の遺構はB・C区で確認することができたが、非常に層の薄いものである。B区で確認された住居跡は単独で、遺跡の中では最も標高の高い自然微高地に位置していた。竪穴式住居で彫り込みは浅く、南東コーナーにカマドを持つ。出土遺物から帰属年代は13世紀と考えられる。一方C区に位置する2条の溝はB区の住居跡とは逆に遺跡の中では最も標高の低い部分に位置するものである。層位から、溝が構築される以前には複数回の鉄砲水的な洪水がこの地を襲い、溝を構築した後も同様の洪水に見舞われたことを知ることができる。溝構築以前の砂礫層からも、さらには溝内に堆積する砂礫層中からも、ほとんど磨耗していない状態の内耳土器片、擂り鉢片、杯等が出土した。これらは竪穴住居跡とほぼ同年代であると思われる。地元では明治時代まで度重なる重川の氾濫により被害を受けていることから、中世においても重川の氾濫がこの地を襲っていたことを推測することができる。そのため低地には溝を掘り、居住区は微高地に営まれていたことを今回の調査成果から理解できよう。

出土遺物についても若干触れておく。溝より出土した内耳土器はいずれも破片であり、全体像を推測することは困難である。これらは外面にはすすぐ付着し、内面はヨコナデにより調整されている。口縁部は平坦なものや中央部が若干窪むもの、つまり上げられ内部で若干内湾するものなど多様である。いずれも口縁部から胴上部は膨らみを持つ。底部破片はほとんど出土しなかった。内耳土器及びすり鉢の胎土はいずれも灰茶褐色を呈する。これらの遺物を見る限り、甲府盆地最東端の地域性を若干はあるが感じができる。今後の発掘調査により資料の増加を待ち、地域性を明確にする機会を待ちたい。

近世の遺構は主なものとして墓坑を挙げることができる。墓坑群は2カ所に分かれて所在しており、これらは別々のものであったと思われる。前述のように調査区北側に所在する既存の道に面して、明治27年には調査区内に3軒の屋敷が営まれていた¹⁾。このうちの中央に位置する屋敷の南側にはB区の墓坑群が所在する。これらの墓坑群の南に位置する石垣²⁾は現在では畠の地境として利用されているが、後世に積まれた石垣とはその性格を明らかに異にしており、調達した石をこの場で加工し、積んでいる可能性が高い。このような事実から石垣が屋敷の南境を示すものではないかと思われる。一方墓坑群はそのほとんどが複雑に重複しながら所在する。埋葬にはいずれも座棺が用いられたと思われ、副葬品の陶器類から18世紀後半から19世紀にかけて営まれたものと思われる。また石垣中に残された墓石の銘文から墓石は1693年～1807年に建てられたことを知ることができ、これらの年代と遺物の年代に大きな差は見いだされない。墓坑群は所在の形態から屋敷墓である可能性が極めて高いものと推測できる。

A区では4基の墓坑を確認した。B区の墓と同様に円形もしくは四角形の座棺であり、4基が道沿いに一列に

並んで所在する。発掘調査前には既に4基の石塔群が所在していた。いずれも墓石であるが戒名が記されているだけのものなどB区のそれと比較すると貧弱な印象を受ける。A区の墓域は墓が単独で検出されたものであるため、屋敷墓に属するものなのか、共同墓地的なものなのか不明である。

以上それぞれの遺構について簡単に触れてみた。今回の発掘調査においては、それぞれ資料をわずかに増加させたにすぎないが、今後明らかにして行かねばならない多くの課題を提示することになった。今回の成果が今後の研究の端緒となれば幸いである。

註1 発掘調査時にご近所に在住の村田文一氏に当時の地図を実見させていただいた。

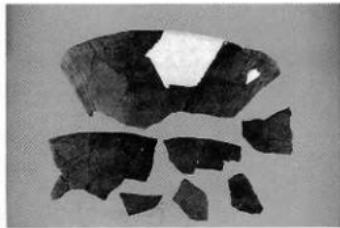
註2 石垣の加工及び墓石については帝京大学山梨文化財研究所　畠大介氏に様々なご教示を頂いた。

縄文時代の調査 —B区—



1 B区完掘状況

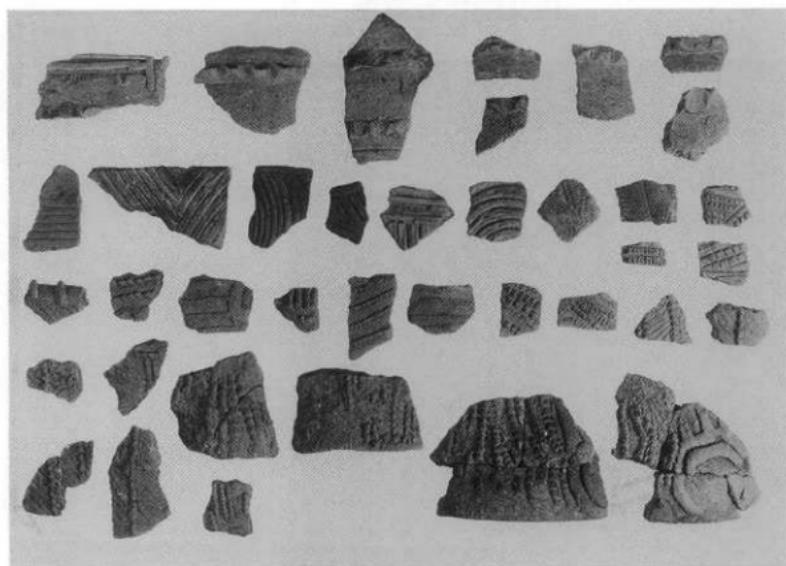
2 2号土坑遺物出土状況



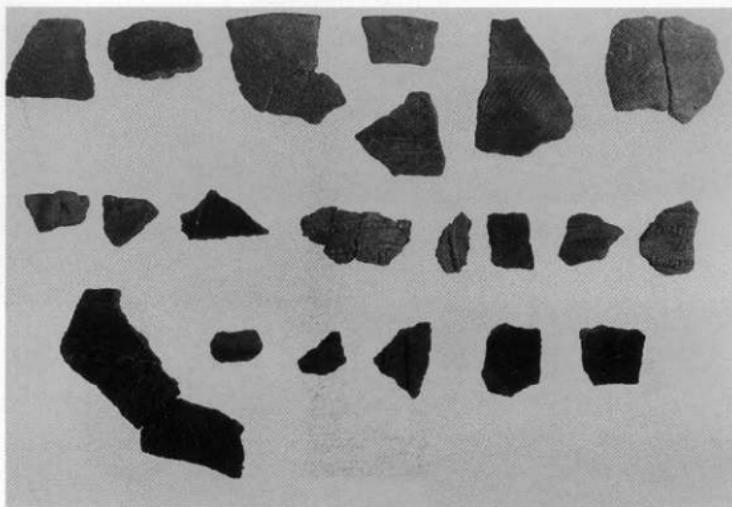
3 2号土坑出土遺物



4 2号土坑出土遺物



5 包含層出土遺物



6 土坑出土遺物

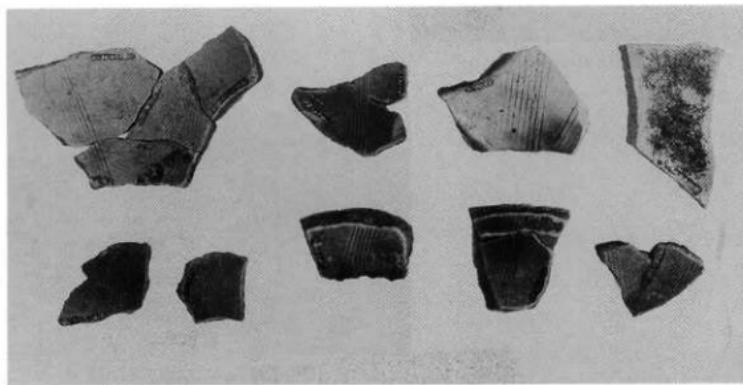
中世の調査 —C区—



7 C区中世1・2号溝



8 溝出土内耳土器



9 溝出土擣り鉢

江戸時代の調査 —A・C区—



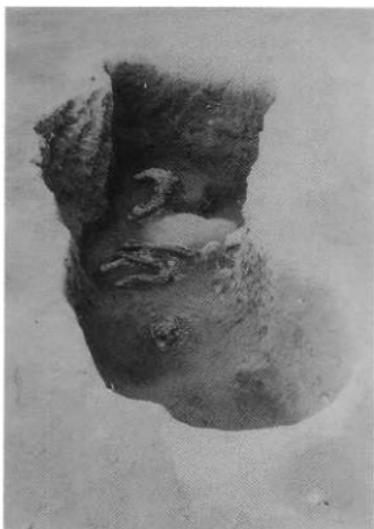
10 調査風景



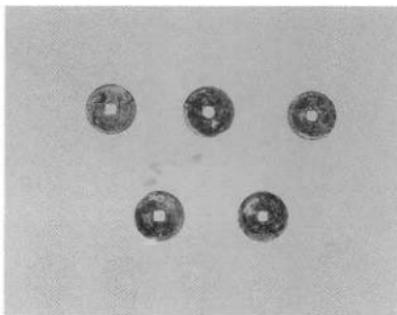
11 調査前の状況



12 道路添いに立地する地蔵



13 2・3号墓



14 2・3号墓出土錢貨



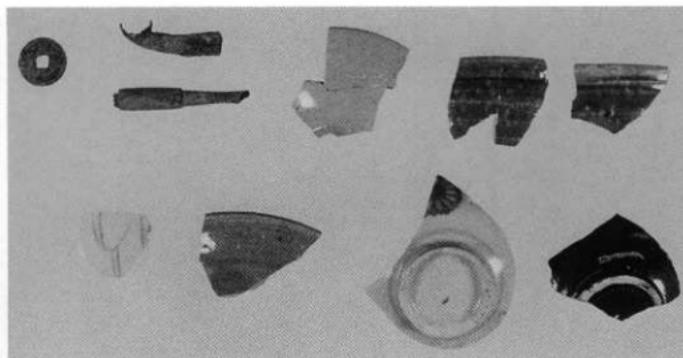
15 4~15号墓



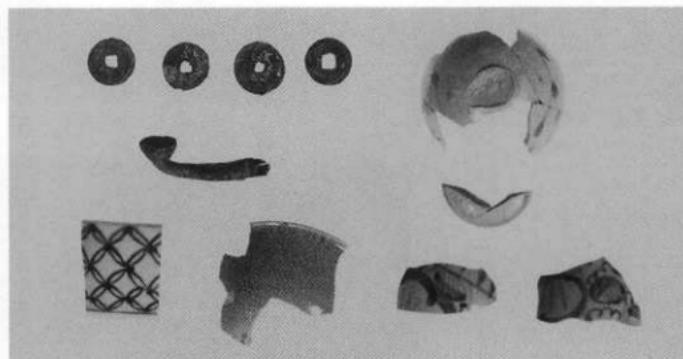
16 4号墓出土キセル吸い口



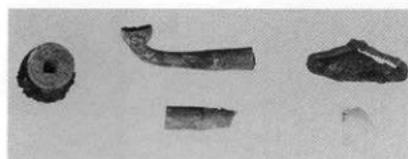
17 4号墓出土キセル雁首



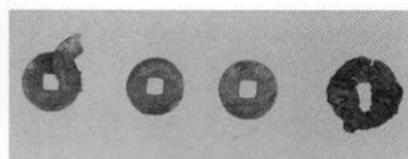
18 4号墓出土遗物



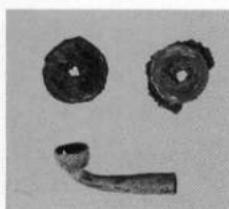
19 5号墓出土遗物



20 6号墓出土遗物



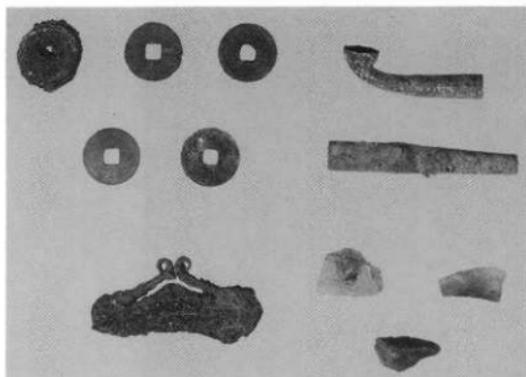
21 7号墓出土遗物



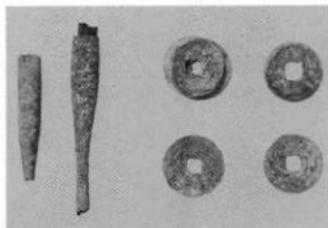
22 8号墓出土遗物



23 9号墓出土遗物



24 11号墓出土遗物



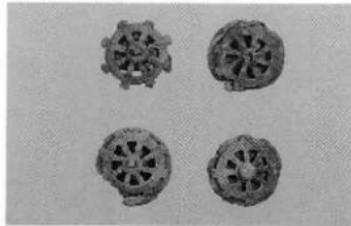
25 12号墓出土遗物



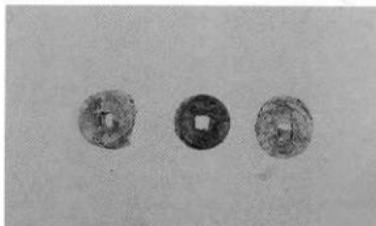
26 13号墓出土遗物



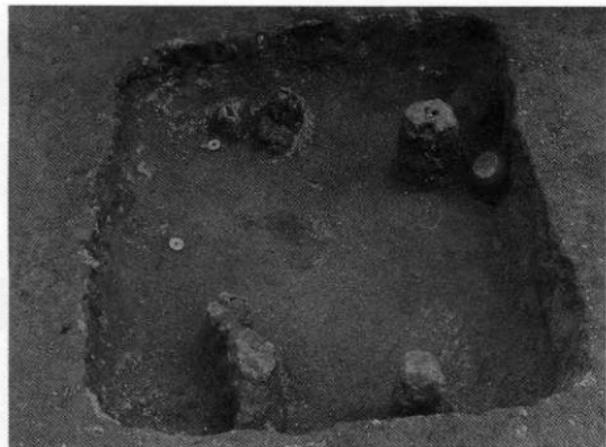
27 16~19号墓全景



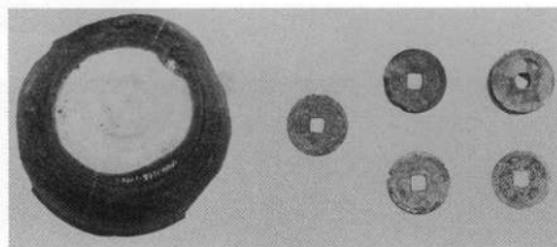
28 18号墓出土遗物



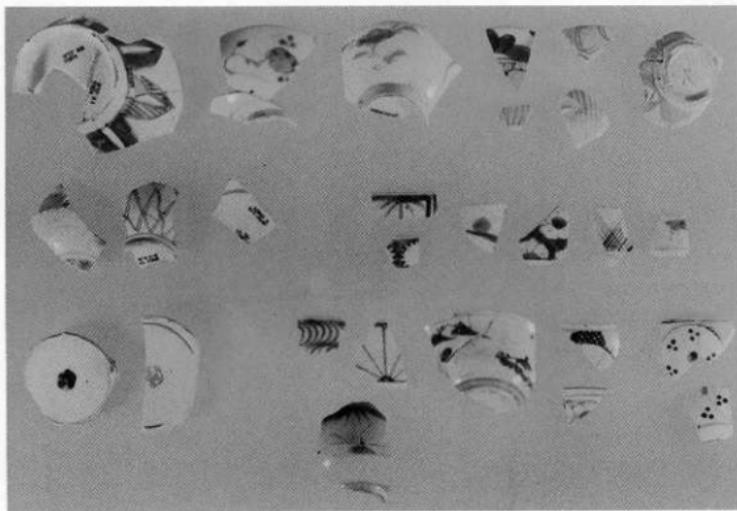
29 19号墓出土遗物



30 16号墓



31 16号墓出土遗物



32 包含層出土遺物

報告書抄録

フリガナ	イボミズイセキ
書名	伊保水遺跡
副題	山梨県立産業技術短期大学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第149集
著者名	石神孝子・米山 真・納倉邦夫
発行者	山梨県教育委員会・山梨県商工労働観光部
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	東八代郡中道町下曾根923 〒400-1508 電話0552-66-3016
印刷所	山梨県甲府市丸の内2-3-24 (株)少国民社
印刷・発行日	平成10年3月23日 平成10年3月31日
概要	所在地 山梨県塙山市千野3568他 地図名・位置 1/25000 塙山 北緯 35° 42' 20" 東経 138° 44' 30" 標高 426m 主な時代 繩文時代、中世、近世 主な遺構 土坑・墓坑 主な遺物 繩文土器・陶磁器・銭貨・キセル・火打ち金 特殊遺構 なし 特殊遺物 なし 調査期間 1997年5月6日～同年9月18日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第149集

1998年3月23日 印刷

1998年3月31日 発行

い　は　み　ず　い　せ　き 伊　保　水　遺　跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

山梨県商工労働観光部

印刷 少国民社

